八　國讓の交渉

(イ)　天菩日命、天若日子、建御雷神と伊邪那岐伊邪那美二尊

天照大神之子正哉吾勝々速日天忍穗耳命娶高皇產靈神之女栲幡千々姫生天津彦火々瓊々杵尊故皇祖高皇產靈尊特鍾憐愛以崇養焉遂欲立皇孫天津彦火々瓊々杵尊以爲葦原中國之主然多有彼螢火光神及蠅聲邪神復有草木滅能言語故高皇產靈尊召集八十萬神而問之曰吾欲令撥平葦原中國之邪鬼當遣誰者宜也惟爾諸神勿隱所知僉曰天之穗日命是神之傑也可不試歟於是俯順衆言即以天之穗日命往平之然此神倭媚於大巳貴神比及三年仍不報聞仍遣其子大背飯三熊大人此云于志亦名武三熊之大人此亦還順其父遂不報聞故高皇產靈尊更會諸神問當遣者僉曰天國玉之子天稚彦是壯士也宜試之於是高皇產靈尊賜天稚彦天鹿兒弓及天羽々矢以遣之此神亦不忠誠也來到娶顯國玉之女玉下照姫留住之曰吾亦欲馭葦原中國遂不復命是時高皇產靈尊恠其久不來報乃遣無名雉伺之其雉飛降止於天稚彦門前所殖湯津杜木之抄時天探女見而謂天稚彦曰奇鳥來居杜抄天稚彦乃取高皇產靈所賜天鹿兒弓天羽々矢射雉斃也其矢洞達雉胸而至高皇產靈尊之坐前也時高皇產靈尊見其矢曰是矢則昔我賜天稚彦之矢也血染其矢蓋與國神相戰而然歟於是取矢還投下之其矢落下則中稚彦胸上于時天稚彦新嘗休臥之時也中矢立死此世人所謂反矢可畏之緣也天稚彦之妻下照姫哭泣悲聲達于天此時天國玉聞哭聲則知夫天稚彦已死乃遣疾風擧戸致天便造喪屋而殯之即以川鴈爲持埴頭者及持帚者又以雀爲舂女而八日八夜啼哭悲歌先是天稚彦在葦原中國也與味耜高彦根神友善故味耜高彦根神昇天弔喪時此神容貌正類天稚彦平生之儀故天稚彦親屬妻子皆曰吾君猶在則攀牽衣帶且喜且慟時味耜高彦根神忿然作色曰朋友之道理宜相吊故不憚汚穢遠自赴哀何爲誤於死者則拔其帶劍大葉刈以斫臥喪屋此即落爲山今在美濃國藍見川之上喪山是也世人惡以生誤死此其緣是也

復高皇產靈尊更會諸神選當遣於葦原中國者僉曰磐裂根裂神之子磐筒男磐筒女所生之子經津主神是將佳也時有天石窟所住神稜威雄走神之子甕速日神甕速日

神之子燥速日神、燥速日神之子、武甕槌神此神進曰豈唯經津主神獨爲丈夫而吾非丈夫者哉其辭氣慷慨故以即配經津主神令平葦原國二神於是降到出雲國五十田狹之小汀即拔十握劍倒植於地踞其鋒端而問大己貴神曰高皇產靈尊欲降皇孫君中臨此地上故先遣我二神驅除平定汝意如何當須避不時大己貴神對曰當問我子然後將報是時其子事代主神遊行在於出雲國三穗之崎以鈎魚爲樂或曰遊鳥爲樂故以熊野諸手船載使者稻背脛遣之而致高皇產靈神勅於事代主神且問將報之辭時事代主神謂使者曰今天神有此借問之勅我父宜當奉避吾亦不可違因於海中造八重蒼柴籬蹈船枻而避之使者既還報命故大己貴神則以其子之辭白於二神曰我怙之子既避去矣故吾亦當避如吾防禦者國內諸神必當同禦今我奉避誰復敢有不順者乃以平國時特所杖之廣矛授二神曰吾以此矛卒有治功天孫若以此矛治國者必當平安今我當於百不足之八十隈將隱去矣言訖遂隱於是二神誅諸不順鬼神等果復命于時高皇產靈以眞床追衾覆於皇孫天津彦々火瓊々尊使降天之皇孫乃離天之磐座且排天八重雲稜威之道別道別而天降於日向襲之高千穗峯矣

と記には

天照大御神のみこともちて、豐葦原の千秋の長五百秋の瑞穗國は、我が御子正哉吾勝々速日天忍穗耳命の、知らさむ國と言依さし給ひて、天降し給ひき。ここに天忍穗耳命、天の浮橋の上に立して宣り給はく、豐葦原の千秋の長五百秋の瑞穗國は、いたく騷ぎてありけりとのり給ひて、更に還り上らして、天照大神に申し給ひき。爾れ高御產巢日神、天照大神のみこともちて、天の安の河の河原に、八百萬の神を神集へに集へて、思兼神に思はしめて宣り給はく、此の葦原の中國は、我御子の知らさむ國とこと依さし給へる國なり。故れ此の國に千早振る荒ぶる國つ神どもとのさはなると思ほすは、何れの神を遣はしてかことむけましとのり給ひき。爾に思金神及八百萬神達議りて、天菩比神を遣はしてむと申しき。故れ天菩比神を遣はしつれば、やがて大國主神にこびつきて、三年になるまで復りごと申さざりき。ここをもて高御產巢日神、天照大神、亦諸の神たちに問ひ給はく、葦原の中國に遣はせる天菩比神、久しく復へりごと申さず、亦何れの神を遣は

してばよけむ。爾に思金神申しけらく、天津國玉神の子若日子を遣はしてむと申しき。故れここに天のまかこ弓、天の羽々矢を天若日子にたまひて遣はしきここに天若日子彼の國に下りつきて、即ち大國主神の女、下照比賣を妻とし、亦其の國を得むと思ひはかりて、八年になる迄復り言を申さざりき。故れここに天照大御神、高御産巣日神、亦諸の神たちに問ひ給はく、天若日子久しく復りこと申さず。又何れの神を遣はしてか、天若日子が久しく留まる故を問はしめむと問ひ給ひき。ここに諸の神たち及び思金神申さく、雉名鳴女を遣はしてむと申すときにのり給はく、汝行きて天若日子に問はむさまは、汝を葦原の中國につかはせる故は、其の國の荒ぶる神どもをことむけやはせとなりなぞ八年になるまで返りこと申さざると問へとのり給ひき。故れ爾に鳴女天より下りつきて、天若日子が門なる、湯津楓の上に居て、先づ委さに天つ神のおほみことのごとのりき爾に天のさぐめ、此の鳥のいふことを聞きて、天若日子に此の鳥は泣く聲いと惡し、射殺し給ひねといひ進むれば、即ち天若日子、天つ神の給へる天の波士弓、天の加久矢をもちて、此の雉を射殺しつ、爾に其の矢雉の胸より通りて逆さまに射上げられて、天の安の河原にまします、天照大神、高木神のみもとに至りき。是の高木神は高御産巣日神のまたの御名なり。故高木神其の矢を取らして見そなはすれば、其の矢の羽に血つきたりき。云々（以下紀と同じ故に略す）

ここに天照大御神のり給はく、亦何れの神を遣はしてばよけむ、爾れ思金神及び諸の神たち申しけらく、天の安の河の河上の、天の岩屋にます、名は伊都之尾羽張神、是れ遣はす可し。若し亦此の神ならずば、其神の御子建御雷之男神、此れ遣はすべし、且つ其の天尾羽張神は、天の安の河の水をさかさまにせき上げて道を塞ぎ居れば、あだし神は得往かじ、故れ別に天迦久神を遣はして問ふ可しと申しき。故れ爾に天迦久神を遣はして、天尾羽張に問ふ。時にかしこし仕へ奉らむ、然れども此の道には吾が子、建御雷神を遣すべしと申して即ち奉りき。爾れ天鳥船神を建御雷神に副へて遣はしき。是をもて此の二柱の神、出雲國伊那佐の小濱に下りつきて、十掬劍を拔きて波のほに逆しまに刺し立てて、其の劍の先きにあ

くみゐて、其の大國主神に問ひ給はく、天照大御神、高木神の命もちて問ひに遣はせり、汝がうしはける葦原中國は、我が御子の知らさむ國と言依さし給へり。故れ汝が心如何にぞと問ひ給ふときに、答へまつらく、吾は得申さじ、我子八重事代主神、是の申すべきを、鳥の遊び漁りしに、御大之前に往きて未だ還り來ずと申しき。故れ爾に天鳥船神を遣はして、八重事代主神を召し來て問ひ給ふときに、其の父大神に、かしこし、此の國は天つ神の御子に奉り給へといひて、即ち其の船を蹈み傾けて、青柴垣に打ちなして隱りましき。故れ爾に其の大國主神に問ひ給はく、今汝が子事代主神、かく申しぬ、亦申す可きこと有りやと問ひき。ここに亦白しつらく、亦吾が子建御名方神あり、是をおきてはなし、此く申し給ふ折りしも、其の建御名方神、千引石を手なすゑにささげて來て、誰ぞ我が國に來て忍ぬび忍ぬびかくものいふ、然らば力競べせん、故れ我れ先づ其の御手を取らむといふ、故れ其の御手を取らしむれば、即ちたちびに取りなし、亦劍及に取り成しつ、故畏れて退き居り、爾に其の建御名方神の手を取らむと乞ひ歸へして取れば、若葦を取

えがごと、つかみ挫ぎて投げ放ち給へば、即ち逃げ去にき。故れ追ひ往きて、信濃國諏訪の湖に攻め至りて、殺さむとし給ふときに、建御名方神申さく、かしこし我をな殺し給ひそ、此の所をおきてはあだし所に往かじ、亦我が父大國主神のみことに違はじ八重事代主神の言に違はじ、此の葦原中國は天つ神の御子のみことのまに〳〵奉らむと申したまひき。故れ更らに且た還り來て、其大國主神に問ひ給はく、汝が子等事代主神、建御名方神二人は、天津神の御子のみことのまにまに違はしと申しぬ。故れ汝が心如何にぞと問ひ給ひき。爾に答へまつらく、我が子等二人の申せるまにまに、吾れも違はじ、此の葦原の中つ國は、みことのまにまに既に獻まつらむ。唯我が住み家をば、天つ神の御子の天津日繼知ろし召さむとだる、天の御巢なして、底津岩根に宮柱太知り、高天原に冰木高知りて、治め給ばば、吾は百足らず八十熊手に隱りてさもらひなむ、亦吾が子ども百八十神は、八重事代主神、神の御をさきとなりて仕へ奉らば、違ふ神は有らじ、此く申して云々、(以下必要なければ略す)故れ建御雷神返りまゐ上りて、葦原中國ことむけはや

しぬるさまを申し給ひき。ここに天照大御神、高木神のみこともちて、日鞨の御子正勝吾勝々速日天忍穗耳尊にのり給はく、今葦原の中國ことむけをへぬと申す、故れ言依さし給へりしまにまに、降りましてしろしめせとのり給ひき。ここに其の日繼の御子正勝吾勝々速日天忍穗耳尊の申し給はく、我れは降りなむ裝ひせしほどに、御子あれましつ、名は天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇々藝尊、此の御子を下すべしと申し給ひき。此の御子は高木神の女萬豐秋津師比賣命に見合ひまして、生みませる御子天火明命、次に日子番能邇々藝尊にます。是を以て申し給ふまに〳〵日子番能邇々藝命にみこと仰せて、此の豐葦原の水穗國は、汝知らさむ國なりと言依さし給ふ。故れみことのまにまに天降りますべしとのり給ひき。

と是に由りて觀るときは、紀には經津主神と、建甕槌の二神にして、建甕槌は副使である記に云ふ天鳥船は艇であるからして、建御雷一人で有る。而して紀には建御名方の反抗の一節がない。伊邪那岐命が、迦久土神を斬つた所に「御刀の先につける血湯津石村にたばしりつきてなりませる神の御名は、石拆神次に根拆神次に岩筒之男神、次に御刀の本につける血も湯津石村にたばしりつきて成りませる神の御名は、甕速日神次に樋速日神次に建御雷之男神亦の名は建布津神亦の名は豐布都神」と有り、書紀の一書に曰くとして掲げたる中に「遂拔所帶十握劍斬訶遇突智爲三段」此各化爲神也後劍及垂血是爲天安河原所在五百箇磐石也即是經津主神祖也矣後劍鐔垂血激越而爲神號曰甕速日神其次熛速日神其甕速日神是武甕槌神祖也亦曰甕速日神次熛速日神次武甕槌神後劍鋒垂血激越爲神號曰磐裂神次根裂神次磐筒男命一云磐筒男命及磐筒女命更に「斬訶遇突智時其血激越染於天八十河中所在五百箇磐而因化成神號曰磐裂神次根裂神兒磐筒男神次磐筒女神兒經津主神」と出てゐて、飽くまでも經津主と武甕槌とを別人としてゐるに反し、古事記はどこ迄も同人としてゐる、記によるときは經津主は建御雷の別名で、建布津又は豐布津である。是は本居宣長が云つたやうに書紀の別人としたのは誤りである。

何故に日本書紀の傳が誤つてゐるかと云ふに、經津は刀の能く切れるより云つた

名であつて、此のフツと云ふ語は現今にてはフツリ思ひきるフツリと切つた等のフツ、フツの語原である、武御雷神が奮戰して敵を切り倒す樣をば稱へて、豐經津、武經津、經津主等と云つたので、別にさう云ふ人格神が居つたのではない、夫れをば韓族若しくは史部に任用せられた者共が、別人かと誤解して記錄に殘したものを安萬侶も亦之を知らずして、日本書紀に採錄したものである。

武御雷神は、伊邪那岐命が火の神を征服した處に出現した神で、之れは其の戰鬪の狀の猛烈なるを形容した語で有る。夫れが今爰に人格者として再び出現したる所以は何であらうか。廣く史を按ずるに、初め伊邪那岐伊邪那美二尊の出發に當りて、「天神もろもろの御こともちて云々」と有る、之れは其の當時の祖國政府の命を受けて、出發したもので有ると云ふことを述べたが、夫れが又國讓の交渉の最初にも出てゐる。即ち伊邪那岐伊邪那美二尊の出發當時と、此の國讓交渉開始とが同一の事柄で有るからでは有るまいか。天若日子の死は、伊邪那美命の死に當り天鳥船神と武御雷神を下したとある、天鳥船神は火の神出現の前に出現した神で、ある。而して予は此の神の出現の所に於ては本文のまゝに二尊が作つたものと說いて置いた。而して此の建御雷は前述のやうな神であつて見れば、天穗日命以下武御雷神迄の話は、矢張り伊邪那岐伊邪那美命の話が、此の如く語り傳へられたので有らう。して見れば此の武御雷神の行動は、即ち伊邪那岐命の行動で有つて、伊邪那岐命對火の神、須佐之男命對八岐の大蛇、建御雷神對大國主神の出來事は、出雲地方に於ける一つの話が、三樣の出來事のやうに語り傳へられたもので有ることは、爭ふ餘地がないやうに思へる。

(ロ) 近畿地方の三大勢力

然るに爰に又一つの疑問が生ずる。夫れは大國主と事代主と建御名方の三人が、父子兄弟の間柄で有つたか否かと云ふ事である。若し之を父子兄弟の間柄で有るとするときは、大國主と事代主とは出雲に隱棲し、建御名方は信濃の諏訪に退讓した、其の地が餘りに離れ過ぎてゐる、加之大國主の子とするときは、建御名方は相當に勢力の有つた人であるが故に、大國主の子として其の名を擧げてゐなければならないのに、大國主の子としても、亦其の裔と

しても其名が見當らない。是に於てか思ふ。是の時に當り近畿中國を支配してゐた、三大勢力が有りはしなかつたかと。即ち一は大國主統治の近畿山陰の一部一は事代主の山陰の西部、一は建御名方統治の東國に於けるものとの三大勢力である。古事記に「吾が子八重事代主神云々吾が子建御名方神あり云々」と云ひ、日本書紀の「問二吾子一然後將報云々」の如きは、他に二大勢力あるを指示したものとも見られる。而して其中の最も勢力の盛大なりしものが、大國主では有るまいか。曩に火の神治下の狀況を述べたやうに、工業も農業も最もよく開けてゐた、此の点よりして我が天孫系の人々が、彼を稱して大國主とも云ひ、顯國玉とも云ひ、亦其領土の廣きよりして、大穴牟遲(大名持)とも云ひ、其の兵力の盛んなるよりして、八千矛神と云ひ、其の威力が我が民族をして、頗る手古摺らしめたるよりして、葦原醜男とも云つたのであらう。是に於てか彼の伊邪那岐命の奮戰の狀が語り傳へられたのである。而も猶遂に全然之を屈伏することを能はず、漸く和談成立して、彼我合体するに至つたので有る。故に曰く「此の芦原の中つ國はみことのまゝに、既に奉らむ、唯我が住み家をば、天つ神の御子の、天つ日繼知ろし召さむとだる、天の御巣なして、底つ岩根に宮柱太知り、高天原に氷木高知りて、治め給はば、吾は百足らず、八十熊手に隱りてさもらひなむ云々」と、其自己の待遇を皇室と同格ならしめんことを要求したるが如き、其自負の如何に尊大なりしかを想ふべく、亦書紀に「如我防禦者國內諸神必當二同禦一云々乃以二平一國時特所杖之廣矛授二二神一曰云々」の、前半は大國主が猶戰鬪力あることを示したもので、其後半は其の力を以て、天孫派の行動を助けたものと見るべきもので有る。

此の如く見來れば、火の神即ち大國主神で有ることが首肯せられる。而して此の大國主が朝鮮系統であるからして、其の子或は子孫として傳へられた神々は、其の統治下の一部地方の酋長か、若しくば朝鮮系の民族が、宗教上の神とし祭つてゐたものと、伊邪那岐伊邪那美二尊、及須佐之男命の條に見はれた神が二重に出てゐるのである。

(ハ) 大國主系統の神名に就て

此に大國主系統の神として傳へられたる

神名を更に列擧すれば、

- 大國主神
  - 木俣神（母は八上比賣）
  - 阿遲鉏高日子根神（母多紀理比賣）
  - 高比賣命（一名下光比賣（母同上））
  - 事代主神（母神屋楯比賣）
  - 鳥鳴海神（母鳥耳神巽本鳥取神、父八島士奴美神）
  - 國忍富神（母日名照額田毘道男伊古知邇神）
  - 速甕之多氣佐波夜遲奴美神（母は片那陀迦神）
  - 甕主比古神（母は天甕主神の女前玉比賣）
  - 多比理岐志麻流美神（母は淤迦美神の女比那良志比賣）
  - 美呂波神（母は比比羅木之其花麻豆美神の女活玉前玉比賣）
  - 布忍富鳥鳴海神（母は敷山主神の女青沼馬沼押比賣）
  - 天日腹大科度美神（母は若葦女神）
  - 遠津山岬帶神（母は天狹霧神の女遠津待根神）
- 須佐之男命
  - 大年神（母は神大市比賣）
    - 大國御魂神
    - 韓神
  - 曾富理神（母は神活須毘神の女伊怒比賣）
    - 向日神
    - 聖神
    - 大香山戸臣神
    - 御年神（母は香用比賣）
    - 奥津日子神（以下母は天知迦流美豆比賣）
    - 奥津比賣神
    - 大山咋神
    - 庭津日神
    - 阿須波神
    - 波比岐神
    - 香山戸臣神
    - 羽山戸神

- 庭高津日神
- 大土神（一名土之御祖神）
- 若山咋神（以下母は大氣津比賣）
- 若年神
- 若沙那賣神
- 彌豆麻岐神
- 夏高津日神　一名夏之賣神
- 秋毘賣神
- 久々年神
- 久々紀若室葛根神

以上大國主系統に見はれたる神名の中、伊邪那岐命の條に見はれたる神名にはあらずやと思はれるものを擧ぐれば、

木俣神　之れは道俣神の誤りでは有るまいか、きとちとは古來相通はしてゐる、

高き穗を高ち穗と云へる類。

淤迦美神は闇淤迦美神と同一、

比那良志毘賣は、時置師神の意義に同じ、

天之甕主神甕主日子神は甕速日神の意に近し、

速甕之多氣佐波夜遲奴美神の、速甕之多氣佐波夜遲は、速は敏捷の義、甕は前に說ける如く强烈の義、多氣はタケル、佐波夜遲はさはやぎにて、伊邪那岐命の奮鬪の狀を謂つた、甕速日以下の神名を集めたやうなもので有る、

敷山主神は繁山津見神の誤りか、

天狹霧神　之れは伊邪那岐命のオノコロ島上陸の段に出てゐる、天之狹霧神であらう。

若晝女神は　日本書紀に出てゐる、大日靈貴命に對して生み出したものであらう。

天日腹大科度美神　天日腹とは如何なる意味か不明であるが、大科度美は大科

戸部にて、オノコロ島發見の條の、志那都比古神(風神)と同意義と云つても宜しい。

遠津山岬帶神　之れにも遠き處に陸地有るを云つたまでで、帶は足はし都するによき處として、此の語が附せられたと見るときは、之れ亦阿波岐原の段の、奥疎神、奥津那藝佐比古神を一つにしたやうなものである。

大國魂神は、大國主の別名と見るも差支はあるまい。

韓　神　之れは出雲族の本國駕洛の地を云つたものか、或は天孫降臨の條にそしのから國と有るから、此の神名を生み出したものか。

曾富理神　日本書紀の一書に曰くとして出てたる中に曰く、呼曰日向襲高千穗添山峯とあるより、此の神名を生み出したもので有らう。

向日神　之れは向日別から來たものであらう。

香用比賣　草野比賣の誤りではないか。

大香山戸臣神　香山戸臣神此の二神は淤縢山津見神と戸山津見神を一つにしたやうなものである。

御年神　若年神此の二神は大年神と同意義。

奥津日子神　奥津比賣神此の二神は、奥津那藝佐比古神を男女二神にしたやうなものである。或は新羅族は航海部即ち大海津部であつたらしいので、其の大海津部の祭神か。

大山咋神　大山津見神と思へる、若山咋神も亦此の神に對して云つたもので有らう。

羽山戸神は羽山津見神に同じ。

夏高津日神(一名夏比賣神)　天之冬衣神(大國主父)秋毘賣神、以上三神は皇孫の妃、木之花咲耶姫をば、春の神に見立てて、此に夏秋冬の三神を生み出したものではないか。

久々年神は久々廼遲神の誤りか。

布波能母遲久奴須奴神以下、更に意味不明の神を擧ぐれば、

布波能母智久奴須奴神、深淵之水夜禮花神、淤美豆奴神、布怒豆奴神、布帝耳神、天之都度閇知泥神、剌國大神、剌國若比賣神、阿遲鉏高日子根神、高比賣命、神屋楯比賣神、鳥耳神、鳥鳴海神、日名照額田毘道男伊古知邇神、國忍富神、芦那陀迦神、比々羅木之其花麻豆美神、多比理岐志麻流美神、美呂波神、青沼馬沼押比賣、布忍富鳴海神、遠津待根神、伊怒比賣、聖神、天知迦流美豆比賣、阿須波神、波比岐神、庭高津日神、若沙那賣神、彌豆麻岐神、久々紀若室葛根神、

であるが、此の外に重大な意味を有し且つ出雲族の一部を物語る神樣が二つある。速甕之多氣佐波夜遲奴美神の婦となつてゐる前玉比賣、及び多比理岐志麻流美神の婦となつてゐる。前玉活玉比賣である。此の玉を字の如く美稱とし、活を活產巢日の活とし、前を幸の義とする時は問題は起らないが、さう一方にのみ解く譯には行かぬ、玉は美稱であらう、而し前は新羅本紀等に出てゐる昔で積女國の積ではあるまいか、キとクとは通して用ゐるから、前も積も同一である、現今でも次ぎの日等云ふとき、次ぐの日と發音する地方がある、上代に於ても、莖を久々と云つてゐる、

斯く見來るときは、此に重大なる問題が起るのである。天若日子をして遂に戰死せしめたのは、天探女とは何者であらうか。火の無き所に煙は立たず、神秘的な傳說の中にも、其の民族としての何者をか物語る所がなからねばならぬ、天若日子は矢に當りて死んだ、さうして其の矢は若日子が射た矢を、高御產巢日神が投返へして若日子に當つた、而して若日子をして此の矢を射しめたのが天探女である。此の一段の話は若日子が出雲族と戰ひ戰死したことに端を發したのであつて、相手は出雲族であつた。然らば此の附會の傳說の中に突如として出現し、而して若日子をして死に至らしめた、天探女の正体を明らかにせねばならぬ。新羅本紀脫解王の傳に曰く「多婆那國王含達婆」女國王女」云々多婆那國在倭東北一千里」と、又三國遺事に曰く「多婆那國王含達婆」積女國王女」云々と、新羅本紀は頗る改作したるものであつて、積女國と其の國名を出せば、事實曝露する恐ある爲めに、殊更に女國王女として、之を誤瞞化したのであるが、同じ改作したものでも三國遺事には積女國と出てゐる。此の積女國が何處であつたかを研究すれば、

此に端なくも天探女なる語が出てくる。天は大和民族特有の贊美語である、贊美語を棄てて見るときは探女となる。探女とは如何なる意味であらうか、サクの宛字が探であるから探るの義に取る譯にも行くまい。此のサクの義は「さくくしろ五十鈴の川」と續けてゐる、さくの義であらう。さくは岩等をわることで岩拆根拆の拆で有る。くしろは地を掘ることを云ふ、現在地方には穴を掘り或は物を土中より掘ることをクジルと云ふ、此のクジルはクシロの轉したものではあるまいか、イスズのイは發頭語でスズは濯ぐの意である。即ち川の中の土砂を掘り或は岩石を拆き何物かを取りて、之を洗い濯いたので、さくくしろ五十鈴の語は出來たのである。然らば何を取つたのであらうか。神武天皇の皇后を富登多々良伊須々岐比賣命と申し、命の母は勢夜多々良比賣と云ふ、此の命の御名の富登は火の神の條に說明した「ほと」で、火處の義である、而して又多々良は火を起す昔の器械で、火處に風を送るやうに仕掛けたもので足にて左右交互に踏みて、風を煽り火を起すやうになつてゐる。之れ即ち神武天皇時代に、早くも鐵工業の有つた證據である。

火の神の條に出雲地方の文化を物語つた神名の中に、金山毘古金山毘賣とあるのは、實に之を言つたもので、既に神武天皇以前より鐵工業のあつたことは明白である。されば富登多々良とは、鐵工業を爲すことを云つたもので、陰部に矢が突き立つたから、たゝら踏んで逃げ出したのではない、又命の名の伊須々岐は砂鐵を取つて之を水に濯ぎ分けたから、夫れを云つたもので、陰部を濯いだのでも矢を洗つたのでもない、さればさくくしろ五十鈴の川と云ふは、岩を拆き土を掘り砂鐵を取りて之を濯ぎ分けたと云ふ事から出て來たので、此の鐵の採取に從事してゐたものを「拆く部」と云つたものではあるまいか。大海津見大山津見の見が部であり津美の美は沖繩ではメと云ふ、メとベとは通はして云つたので有るから)探女即ち拆部である。さうして此の拆部は出雲族で有ることは、大物主の傳說の附會せられてゐることや、火の神の條の金山比古等から思ひ合はすれば判然するであらう。朝鮮上古史に見はれた昔氏(サク)は、此の探(サク)であり、積女(サクメ)國は拆部を云つたものであらう、伊邪那岐命の時にも、神武天皇の東征にも、大和民族をして最も手古摺らしたものは、

此の拆部共であつたので、今でも自己の自由にならぬものを天の邪鬼と云ふのは、此の天の拆女の轉訛したものであらう。されば此に出てゐる前玉比賣、活玉前玉比賣の二神も亦出雲族拆部の祭神であつたらう、故に前玉の夫と爲つてゐる神が、伊邪那岐命の奮闘の狀を示した神名を一人で集めたやうな名を付けて、大和民族と相爭ふたことを、ほのめかしてゐるのではあるまいか。暫く記して更に後人の解說を待つ

以上の如く大國主系統の神々が、伊邪那岐命の所に出てゐる神に似てゐたり、或は意味不明なもので有つたりしてゐるのは、之れ即ち出雲族としての祭神やら、或は本來祭神を有しなかつた者共が、俄に祭神を作つたりした爲めに、斯の如きことに成つたのであらう。さうして其の神をば、悉く大和民族系統の神たらしむべく、結び付けた爲めに、此の如き神樣が出來上つたのであらう。

以上で大國主神の解決は着いたが、事代主と建御名方の勢力はどうであらうか。事代主神の事に就ては、爭闘の後が見へない点よりして、之は出雲勢力の別派で、譯なく降伏したものであらう。建御名方に至りては、可なり激しい爭闘が行はれてゐることが、古事記によりて傳へられてゐる。而して其の退讓の地が、信濃である点から見て、建御名方は朝鮮系統の人ではなくして、他の種族の人らしい。是れ即ち北方より南下して來た勢力で、伊勢の邊から東國にかけて、雄視してゐたものであらう。即ち建御雷神は、西の方事代主を服し東の方武御名方を服し、爰に始めて其の使命を全ふしたので有る。

以上述べ來りたる所を更に約言すれば伊邪那岐命須佐之男命天穗日命建御雷は同一人で有り、天若日子、伊邪那美命は之れ亦同一人で有り、而して我が本州には火の神即ち大國主神と、事代主神と、建御名方神との、三大勢力があり、而して伊邪那岐命は火の神との第一回の衝突に於て利を失ひ、天若日子(伊邪那美命)の戰死となり、第二回戰に於て勝利を得、其後の交渉に於て和議成り、其の報酬として火の神を遇するに、皇室と同等ならしむることを約し、さて又西の方事代主を服し、東の方建御名方を降したので有る。而して此の葦原中國平定の成功したる一大原因は、大國

主神の歸順に在ることであるからして、後日大國主神を祭るとて「出雲國の多藝志の小濱に、天のみあらかを作りて、水戸の神の竺櫛八玉神を膳夫として、天の御饗奉るときに、禱き申して云々、是の吾が燧れる火は、高天原に神產巢日御祖命のとだる天の新巢の煤の八柄垂るまで、たき上げて、土の下は、底津磐根にたきこらして、栲くの千尋繩打ち延へて、鈎らせる海人が大口のをはだ鱸、さわ〳〵に引き寄せ上げて、さき竹のとををとをを、天のまなぐひたてまつらむ」とて出雲の大社として、皇室の尊崇淺からざる所以も亦茲に有るので有らう。此の如くにして、漸く豐芦原の中國を言向け和めることが出來たので有る。

第三章　日向朝廷

(イ)　天孫臨降の實際

さて天孫は何れに降りたか紀に曰く

于時高皇產靈神以眞床追衾覆於皇孫天津彦々火瓊々杵尊乃離天磐座且排天八重雲稜威之道別道別而天降於日向襲之高千穗峯矣既而皇孫遊行之狀也者則自穗日二上天浮橋立於浮渚在平處而膂肉之空國自頓丘覓國行去到於吾田長屋笠狹之碕矣其地有一人自號事勝國勝長狹皇孫問曰國在以不對曰此焉有國請任意遊之故皇孫就而留

記には曰く

ここに天照大御神高木神のみことともちて、日繼の御子正勝吾勝々速日天忍穗耳命に宣り給はく、今芦原の中國言向け訖へぬと申す、故れ言依さし給へりしまに降り坐して、知ろしめせとのり給ひき。爾に其の太子正勝吾勝勝速日天忍

穂耳命の申し給はく、吾は降りなむ裝ひせし間に、御子あれましつ、名は天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇々藝命、此の御子をドすべしと申し給ひき。此の御子は高木神の女萬幡豐秋津師比賣命に見合ひまして生みませる御子天火明命、次に日子番能邇々藝命に坐す。是をもて申し給ふまに〳〵日子番能邇々藝命にみこと負ほせて、此の豐葦原の水穂國は、汝知らさむ國なりと言寄さし給ふ。故れみことのまに〳〵天降りすべしとのり給ひき。爾日子番能邇々藝命天降りまさむとするときに、天の八衢にゐて上は高天原を照らし、下は芦原の中國を照らす神ここに在り。故れ爾に天照大御神高木神のみこともちて、天宇受女神にのり給はく、汝は手弱女なれども、い向ふ神と面勝つ神なり。故れ專ら汝行きて問はむは、吾が御子の天降りまさむとする道を、誰ぞ斯くて居ると問へとのり給ひき。故れ問はせ給ふときに答へ申さく、吾は國つ神名は猿田毘古神なり。出で居る故は、天つ神の御子天降りますと聞きつる故。御前きに仕へまつらむとして、まゐ迎へさむらふと申し給ひき。爾に天兒屋命布刀玉命天宇受女命伊斯許理度賣命玉祖命、並せて五伴緒を加へて、天降り給ひき。ここに彼のをきし八尺勾璁鏡及草薙劍亦常世の思金神手刀雄神天石門別神をそへ給ひて宣り給ひつらくは、此の鏡は專ら我が御魂とし、吾が御前を齋くがごと齋き祭り給へ、次に思金神は御前のことを取り持ちて申し給へとのり給ひき。云々（中略）故れ爾に天津日子番能邇々藝命、天の石倉をはなれ、天の八重棚雲を押分けて、稜威の千別きに千別きて、天の浮橋に浮きじまりそり立して、筑紫の日向の高千穂のくしふる岳に天降りましき。云々（中略）

ここにそじしの韓國を、笠沙の岬にまぎ通りて宣り給はく、ここは朝日の直刺す國、夕日の日照る國なり。故れ此そいとよき所とのり給ひて、底つ岩根に宮柱太知り、高天原に氷木高知りてましまし。

以上紀記の記する所によりて見れば、天孫は先づ高千穂の峯に下り、夫れより笠沙の岬に行つたので有る。（笠沙は今の薩摩國加世田なり近畿に向ふぺくして、何故に反對の南方に向つたので有らうか、之を解決するに左の意味を知らねばならぬ。

一、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命
二、天火明命
三、天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇々藝命
四、上は高天原を照らし下は葦原の中つ國を照らす
五、天の岩倉をはなれ（ハナチ）天の八重棚雲を押し分けていつのちわきちわき
六、うきしまりそり立たし
七、そししのから（ムナ）國
八、奇しび　奇し振る

以上の神名と言葉とは天孫降臨の條に現はれてゐるので有るが、古人は是れ等の言葉を如何なる意味に說いたか、其の殆んど凡てが本居宣長の說に誤られて、之れが人の世の出來事で有らうとは、心つかなかつたのである。さうして之れをば只天降りの言葉とのみ思ひ入つてゐたのである。元來天下りの思想は朝鮮から來たものであつて、我が天孫降臨の條には少しも、天降りの事實がないのである。

正勝吾勝々速日天忍穗耳命　前に說いたやうに、須佐之男命の傳說が、伊邪那岐命の傳說の二重に潤色されたものであり、又天照大神との誓約の際に生れた五男三女神が、當時の出來事を物語つた言葉であつて見れば、其の誓約等は無論有りもしなかつた事であり、從つて吾れ勝ちぬと勝ちさび給ふこともなかつたのである。然らば即ち正勝吾勝々速日と云ふ語は、語部共が語り傳へつつ有る間に付け加へたものであつて、此には必要のない言葉である。天は贊嘆の語、のは助辭、忍は宣長の說の如く大しであらう。穗は宣長の說ける稻穗の穗の義ではなく秀の義より來た所の火の義である。古來の學者が皆忍穗を大し穗の義とし、我が國が農業國であることにのみ重きを置いて說を爲し、若しくは宣長の說に誤られた爲めに非常に誤解を來して、遂に天忍穗耳命以下の事が、奇蹟となつて終つたのである。天忍穗は上說の如く、天の大し火で、即ち火山の噴火の天に沖したことを言つたのである。耳は御身である。命は人格稱後のおこと。現代の御方の義である。されば天忍穗耳命とは、火山の

爆發した、即ち天の大し火の有つ時に人となり、世を知ろし召された御方と云ふ意の言葉である。神武天皇の皇子神八井耳命、神渟名川耳命共に八井と渟名川とは地名、其地に人となられた御方なるが故に八井耳命、渟名川耳命と云ひ、而して更に其の地に於ては當時の最高主權者であらせられたるが故に、神と云ふ語を冠したのである。宣長のやうにミミ即ちビビなりとして靈異の義に取つたのは非常なる誤である。

天火明命　此の意義は宛字の示す如き意で、天に沖した噴火の爲めに夜も明らかであつたことを云つたものである。而して是れも矢張り其當時の出來事を以て其の地方の主權者たる人に負はせた名である。

天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇々藝命　是れも番能邇々藝迄は、其の當時の出來事を以て、天孫に負はせ奉つたのである。天邇岐志國邇岐志は、天にぎはし國にぎはしである。天津日高は字の如き意である。番能邇々藝は火のにぎ〳〵しである。以上を綜合して見ると、爆發した噴火は天にとよみ、地にとよみ、空高く噴き上げ、さうして夫れが瀕々と連續したので火の邇々藝と云つたのである。

以上皇子皇孫の御名に見はたるものが悉く火山の爆發である如く此の時代には我が民族の爲めに恐る可き大爆發に遭遇したのである。然らば即ち前掲四以下八迄は、何を說明したものであらうか

上は高天原を照らし下は葦原の中國を照らす。是れ猿田彦の條に見はれた言葉である。猿田彦は天孫が加世田に至り給ふ時の道案内者に過ぎない、而して彦と云ふ点より考ふる時は、地方の長官たりしことは明らかである、されば猿田は又地名であらねばならぬ、猿田がサルタか將たサタが頗る疑はしいのであるが彦に冠せた地名であることは、一点疑ふ可き餘地はない、然らば即ち是れ亦人である人である以上、上は高天原は照らし云々は甚だ可笑しい、故に之れは外のことを云つたものであることが知られる、然らば何を云つたものであらうか、即ち爆發したる火柱が天に沖し、其の火光の四方を照らしたこと

をば、上は高天原を照らし下は葦原の中國を照しと云つたのである。

天の岩倉を離れ天の八重棚雲を押し分けいつの千別き千別き。之れは天孫降臨の條に見はれたる言葉である、前述の如く天孫は地上の御方であらせられた、されば天から降られる道理は萬々ない、即ち此の言葉も亦爆發を云つたものである。天の岩倉とは大山の牙々として天表に聳へたるを云つたもので、倉は倉の字に捉はれてはいけない、前に天之闇戸、國之闇戸とありたる闇即ちクラで、谷である、而して此のクラとも云ふ可き谷は斷巖絶壁である、即ち天表に聳へたる大山が一時に爆發して、岩石土砂を吹き飛ばしたことを云つたものである。天の八重棚雲を押し分けは、爆發したる噴煙の天に沖して、八重棚雲を押し分けたやうに見えたことである。いつの千別き千別きては、噴出したる溶岩土石を四方八方に遠く吹き飛ばしたことを言つたものである。

うきしまりそり立して（平たき處に立して）之れは天孫遊行の狀を述べる處に出てゐる言葉である。浮きしまりは古來浮き洲にて、泥土の固まらぬものと說いてゐるが、霧島山にせよ高千穗にせよ、山中に浮き洲があるであらうか、前述の解說によりて見るに、此の浮き洲と說いた浮きしまりは、溶岩を云つたもので、平たき處に立しては、此の溶岩の奔流が山地より平野に向つて流下したのであつて、立してと云つたのは此の溶岩の奔流をば、天孫遊行の狀と誤り傳へた爲めに用ゐられた言葉である。浮きしまりそり立たしとある、そり立たしは、それ立つの義で、溶岩の奔流を避けて、逃れ行くことを云つたもので、此の場合の立たしは立つの延ばされたるもの、出て立つ等の立つと同じく行くの義である。古人が浮きじまりよりそり立たしと讀んだのは、實に當を得た讀み方であつたけれども、之れも浮きしまりを浮き洲と說いた爲めに、遂に眞意義を捉へ得なかつたのである。

そししの韓國空國　そししは本居宣長等の說の如く、脊梁部の意であるが、脊は肉の少なき處であるから、之れを空國若しくは韓國と同じく、不毛の地であると說いたのは誤りである。肉の多少に關せず單に脊梁の意である、平地や低地は

溶岩の奔流凄まじき爲めに、之をばそゝり立して脊梁なせる、所即ち峯傳ひに、火山灰に埋もれたる、不毛の地をば何所にか止まる可き國ありやと、求め行かれることを云つたものである。日本書紀の一書に曰くとして「檍完胷副國自頓丘覓國行去」云々と出てゐる頓丘の頓は飛彈國の飛彈と同じく、又袴のヒダ(折目の高き所)等と同じく、しはみて高き所を云つたもので、漢字の頓と云ふ字に捉はれて說を爲すが故に、遂に解し得ぬこととなるのである。山あり谷あるのは地のシワで高き所はヒダで、飛彈が山岳の尤も多い所よりして、其の名が出來上たのである。故に自頓丘は山の峯傳ひにの意義を更に一層委しく云つたまでのことである。

奇しび、奇しふる。此の語のびぶは波行下二段の活用であらうか、頗る疑ひなき能はずである。予は思ふ奇しびは奇し火、奇しふるは奇し震るで、一は噴火を言ひ、一は震動を言つたものである、

上掲の本條中の最も必要なる主要語句を解說して、さて飜りて全文を通解して見るときは、從來の解說が非常に誤つてゐたことが判明する。而して高木神(高御產巢日神)などは、全然此の條に出現すべき性質のものでなく、又高木神が天孫に詔りする道理もないことである、即ち伊邪那岐命の復命によりて、移住すべく準備してゐる間に、天邇岐志國邇岐志天津日高火能邇々藝が出來したのであつて、萬幡豐秋津師比賣命など云ふのは、全く語部が語り傳へつつある間に、混入して來たものであつて、高木神等も共に此の條には緣のないことであることは明白である。「是をもて白し給ふまに〳〵日子番能邇々藝命に仰せて、此の豐葦原瑞穗國は汝知らさむ國と言依さし給ふ」とある託宣の語は、蓋し己に天忍穗耳命の時代よりして、言ひ傳へて來た言葉である。然るに今茲に大爆發に遭遇したので、天の八衢に居るのは猿田彥にあらずして、爆發した火山で有る。故に上は高天原を照らし下は葦原の中國を照らしたのである。されば「天照大御神、高木神の御言もちて、天宇受賣命に詔り給はく、汝は手弱女なれども伊牟迦布神と面勝神なり云々」も又無用の語たるは言ふまでもなきことである。古來宇受賣の宇受を色々に論じてゐるけれども、宇

受は決してオヅ等の義にあらずして、ウヅのみあらか、ウヅの御子等のウヅにて美くしきことを云つた語に過ぎない、夫れをば強いて伊牟迦布神たらしめ、面勝神たらしめたるが故に、ウヅの眞意義さへ疑はしくなつたのである。元來神名帳、姓氏錄等の如きものは、其の姓氏の者共、祭主共が強いて自己の氏姓若しくは、祭神を崇高ならしめ、功績をして偉大ならしめんが爲めに、作爲した傳說が附會せられてゐるから、殆んど信を措くに足りない。而して其の附會せられた神話は、何時も無稽の奇蹟的事柄で。事實即ち人間としての事柄ではない、此の條の宇受賣神の如き殊にさうである。爆發に向つて「誰ぞ斯くてをる」と訊問するのは、神樣でも出來ないことであつて、之れは猿女君等が自己の祭神たる宇受賣命をば、功績顯著の神たらしむ可く、本文の意義もよく分らずして附會したもので、此は只單に道案內者として猿田彥を先導たらしめたと云ふことのみである。斯くて天孫は五部の伴緒を率ゐて薩南加世田に向つて進まれたのである。此の際も無論三種の神器は捧持せられたのであらう。然るに此にも亦思兼神、手力雄神、天石門別神が附會せられてゐる、元來思兼神と云ふ神樣はないのである。夫れと共に手力男神も、天石戸別神も天孫に仕へた人格者ではない。思金神は、天穗日命の天降以來附隨して出て來てゐる神で、あの場合の思金は深く思ひ遠く慮るの意で、政府當路の人々が額を集めて熟議したことを云つたもので、特に思金神と云ふ智者が有つたと云ふ義ではない。手力男神は天岩屋戸の條に出てゐるが、之れは根も葉もない附會の傳說であつて見れば、其の人格者として實在したことのないことも自ら明白である又天岩戸別は天の岩倉を離れと同意義の言葉に過ぎない、故に此の三神も此に用のない神である。只常世の思金神は御前のことを取り持ちて申し給へとあるのは、國家の政治は深謀遠慮を盡して取り行ハの意で、之れも祖國代々の天皇が、常に言ひ傳へ相戒められた言葉が、此に傳へられたものであらう。さて「故れ此に天津日子番能邇々藝命天の岩倉を離(ハナチ)れ天の八重棚雲を押し分けていつのちわきにちわきて、筑紫の日向の高千穗の奇しふるたけにあもりましき」と出てゐるのは、天孫の行動ではない、火山の爆發を云つたものである、されば「天の浮橋」だのあもりまし

き」などは、此の條をば天下りと誤解した後に附會せられた言葉である。又「此にそしの韓國を笠狹の岬に國まぎ通りて云々」とあるのは、天孫の行動を云つたものである。此の如き大爆發に屢々遭遇した民族は、本條の末段に在る如く、底つ岩根に宮柱太しき立てたのである。何故に底つ岩根に宮柱太しき立てたのであらうか、從來の學説の如く、上代の家屋が掘り立て小屋式であつたので、深く穴を掘りて柱を埋め立てたことを云つたものではない。底つ岩根とは現代の所謂洪積層である、溶岩をうきしまりと云つたやうに、洪積層と云ふ言葉がないから、底つ岩根と云つたのである。昔の言葉が現代の如何なる言葉に當るかは、古語を解かんとするものの、深く注意すべきことであらう。即ち天忍穗耳命以前より、屢々火山の大爆發之に伴ふて起る所の地震の襲來によりて、此に底つ岩根に宮柱太しき立てて、倒壞の慘害を免るゝことを知つたものである。

（ロ）降臨後の生活狀態　日本書紀に曰く

其地有一人自號事勝國勝長狹皇孫問曰國在耶不對曰此焉有國請任意遊之故皇孫就而留住時彼國有美人名曰鹿葦津姫皇孫問此美人曰汝誰之子耶對曰妾是天神娶山祇神所生兒也皇孫因而幸之即一夜而有娠皇孫未之信曰雖復天神何能一夜之間令人有娠乎汝所娠者必非吾子歟故鹿芦津姫忿恨乃作無戸室入居其内而誓之曰妾所娠若非天孫之胤必當燹滅如實天孫之胤火不能害即放火燒室始起烟末生出之兒號火闌降尊是隼人等祖也次避熱而居生出之兒號彦火々出見尊次生出之兒號火明命是尾張連等祖也凡三子矣久之天津彦々火瓊々杵尊崩因葬筑紫日向可愛之山陵

兄火闌降命自有海幸弟彦火々出見尊自有山幸始兄弟二人相謂曰試欲易幸遂相易之各不得其利兄悔之乃還弟弓箭而乞己釣弟時已失兄釣云々（中略）豐玉姫方産化爲龍而甚慙之曰如汝不辱我者則使海陸相通永無隔絶今既辱之將何以結親泥之情乎乃以草裹兒棄之海邊閉海途徑去矣故因以名兒曰彦波瀲武鵜草葺不合尊復久之彦火々出見尊崩葬日向高尾山之上陵

彦波瀲武鵜草葺不合尊以其姨玉依姫爲妃生彦五瀨命次稻飯命次三毛入野尊次

神日本磐余彦尊[九生]四男[父之彦波瀲武鵜草葺不合尊崩]於西洲宮[因葬]日向吾平山上陵[

古事記に曰く

前略(猿女居祖ノ一節ヲ省ク)故れ其猿田毘古神、あかざにいましける時に漁りして、比良夫貝に其手を咋ひ合はされて云々(中略)是に猿田毘古神を送りてまかり至りて、乃ちことゞに鰭の廣物鰭の狹物を追ひ集めて、汝は天つ神の御子に仕へ奉らむやと問ふ、時に諸の魚ども皆仕へまつらむと申す中に、海鼠申さず云々、(中略)ここに天津日高日子番能邇々藝命、笠沙の岬に顔好き乙女の逢へるに云々、即ち戸無き八尋殿を作りて其の内に入り、土もて塗り塞ぎて產ますときに方りて、其の殿に火をつけてなも生ましける。故れ其の火の盛りに燃ゆるときにあれませる御子の御名は、火照命、次にあれませる御子の御名は、火須勢理命、次に生まれませる御子の御名は、火遠理命、亦の御名は天津日高日子火火出見命。

故火照命は海幸毘古として、鰭の廣物鰭の狹物を獲り給ひ、火遠理命は山幸毘古として、毛の荒物毛の柔物を取り給ひき。爾に火遠理命云々、其の兄火照命其の釣を乞ひて、山幸も己が幸々、海幸も己が幸々云々、海津見大神詣へまつりけらく此の釣を其の兄に給はむ時に、宣り給はむ狀は、此の釣はおぼ釣、須々釣、貧釣、得る釣と云ひて、後へ手に給へ、然して其の兄高田を作らば、汝が命は下田を作り給へ其の兄下田を作らば、汝が命は高田を作り給へ云々、恨みて攻めなば、鹽盈珠を出して溺らし、若し其れ愁ひ申さば、鹽乾珠を出して活かして云々、是に海津見神の女、豐玉毘賣命自らまゐ出て申し給はく、妾早くより孕めるを云々、其海邊の波限に鵜の羽を葺草にして產殿を作りき。此に其の產殿未だ葺き合へぬに、御腹堪難くなり給ひ云々、是をもて其のあれませる御子の御名を、天津日高日子波限武鵜葺草葺不合命と申す云々、日子火々出見命は、高千穗の宮に五百八十年坐しまし。御陵はやがて其の高千穗山の西の方に在り。

是の天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命、姨玉依毘賣命に見合ひて、生みませる御子の御名は五瀨命、次に稻冰命、次に御毛沼命、次に若御毛沼命、亦の御名は神倭

伊波禮毘古命、故御毛沼命は波の穂を蹈みて常世の國に渡りまし、稻冰命は御母の國として海原に入りまし。

と出てゐて大同少異で有るが、邇々藝命と木花咲耶姫、及び海の幸人山の幸人も、火闌命と火照命ととの差は有るが、彦火々出見命と豐玉姫との一條も殆んど同じであつて、吾人が研究材料に資せんとするものに付ては、二書共に同一で有る。先づ第一番に攻究すべきは、祖國の大破壞より免かれた祖先は、何をして生存したかと云ふことで有る。

紀に由れば邇々藝命の薩南加世田に逃れ給ふや、先づ傳へられたものは、山祇神の女との結婚で有る。而して記には猿田彦があざかにて漁りして溺れ、又猿田彦を送り還へした宇受女命が、魚族を集めて皇孫に仕へ奉れと云つた事が出てゐる。其の次ぎが命の木花咲耶姫との結婚の一條である。然るに本居宣長等はあざかは伊勢のあざか阿坂と云つてゐるが、あざかが伊勢の阿坂で有るとすれば、此れは天孫降臨の案内者である猿田彦ではなく、外の話がまぎれて此に加へられたもので有らう。併し天宇受女命の一條は、まがふ方なき此際の出來事で、天宇受女命（此の命でなくとも何人か）が一番に食を海に求めたことを云つたもので、食を求むることは、強ち加世田迄落ち延びたる後でなくとも、其の途中に於ても當然起り來る問題である。されば陸上の大破壞に遭つた祖先は、此に海に向つて食を求めたものので有ると云ふ事は、他に立証すべき材料を求むるの必要はない。邇々藝命の大山津見神の女（紀には單に山祇神とあるけれども同一で有る）との結婚は、山地若くは平野に食を求めたと見る可きである。即ち荒廢の後を受けたる我が祖先が、上下の別なく其の衣食を求めむが爲めに奮鬪したので有る。之に依りて思ふに、猿田彦は山の背を傳ひて逃るる可く、案内者として見はれた人で、山育ちの人で有つて、其の人が食を求むべく漁りしたので、貝に手を取られずとも、溺るることは有り勝ちの事である。夫れが猿田彦許りではなく、我が祖先の此の當時の人々の中には、食を海に求て溺れた人が多々有つたらう。夫れ等が猿田彦の傳説として、此に傳へられたものでは有るまいか、「故れ其の沈み居給ふ時の御名を底どく魂と申し、

其の海水のつぶ立つ時の御名をつぶ立つ魂と申し、其の沫さく時の御名を沫さく魂と申す」と有るのは、多數の人々が溺死したる有樣を云つたもので有る。邇々藝命の時代は、其の衣食にさへも不十分で、安定を得る程には至らなかつたので有らう。斯くて其の御子の時代に至りて、山海の狩漁によりて、稍々衣食を安んずるやうに成つたので有る。故に此に始めて山幸海幸、或は山の幸人海の幸人の言葉が出で來たので有る。兄弟相爭ふたことは取るに足りない傳說で有るが、此の時やうやく海に乾滿の時あるを利用して、漁りすることを潮乾珠潮滿珠によりて神話化したものである。此の如く此の時代に在りては、我が祖先は狩獵と漁業とにより て生計を營む有樣であつて、未だ農業本位となる迄には恢復しなかつた。最も二尊相爭ふ神話の中に、綿津見神の語として、高田下田の語はあるけれども、夫れは單に綿津見神の語に在る丈けで、其他何處にも見當らないのである。若し農業本位であつたならば、稻若くは田或は畑につく可き、山の幸海の幸に對する語がなからねばならぬ。此の當時は未だ田畑の耕耘によりて、生計する程ではなかつた。「浮きじまり平き處にそり立たしそじしのから國をまぎ通りて」とある降臨の語は、其破壞が如何に强烈で有つたかを想見すべく、又其の火照り火闌理（火進み火遠理などは、產殿に火を放つた、其の火の燃ゆるを云つたのではなく、火山の噴火の狀を云つたもので、火遠理命に至つてやや其の勢力の衰へたことを云つてゐる点より見て、多少は田なつものも、畑つものも作るやうに成つたことも見られる。さうして山よりも海の方が、未だ得ものの多かつたことは、山の方は唯山祇神の女と山幸の二つよりないが、海の方は綿津見神、鹽槌翁（之れは海のことに狎れたる人を云つたもので ある）間なし勝つまの小舟（按するに、間無かつまは間なし籠で、之れは舟の狀でもなければ名でもない、間無し籠は今のビクの類で、魚を入るる具である。ビクを小舟に取りつけ有る故に、間なしかつまの小舟と云ふので有る。之れに乘りて出かけるのであるから漁りに行くのである）汐滿珠、汐乾珠（之れは單に干汐と滿汐とで有る）其他鰭の廣物鰭の狹物（廣物は大きなもの狹物は小さな魚の中にても、海鼠、鯛、比佐天貝、鰐なと其名まで出てゐるけれども、毛の蠶物毛の柔物の中では、一つも其名

が出てゐない。之によりて見るときは、海が主で山は從、而して耕作は眞に付けたりに過ぎなかつたので有る。而して更らに天津日高彦波限建鵜葺草葺不合命の御名の、波限建は、川上梟などと同しく、波限建にて、其漁業の盛んなるか、若しくは海岸に都して、漸く回復の緒に着き、發展したことを云つたもので鵜葺草葺不合は、產屋をも葺き合せることが出來なかつたので、物資の欠乏を言つたことばである。斯くて鵜葺草葺不合命の皇子に至りて稻に由緒ある御名が出て來たのである、五瀨命は嚴稻、稻冰は稻飯、御毛沼は御食主、若御毛沼も同一意義(是れは本宣長等の說に從つたもの)で、耕作に力を用ゐたことを明示したもので有る。

是に於てか予は更に思ふ伊邪那岐伊邪那美命以下、此の若三毛沼命以上の人々は、一人として其の本名の傳へられたものはなく、或は地變を明示し、或は生活狀態を意味し、神武天皇の神日本磐余彦命と云ふ御名さへも、御本名ではなく、其若御毛沼命の如きも、矢張り御本名とは思へない。夫れは其の時其時の出來事を以て、其の人々の名に負せて其の物語りを後世に傳へたからで有る。而して伊邪那岐伊邪那美二尊以後の地神の條には、祖國の火山及び地震の活動が、前後錯雜して見はれてゐる。即ち二尊が大八島探險の原因たる、第一回の大爆發が大事忍男神以下の話であり、第二回の爆發が八十禍津日神以下熊野久須毘神迄の話であり、第三回の大爆發が天孫降臨の條となつて見はれてゐる、而して之に火照命火須勢理命火遠理命の爆發を加へると四回となるけれども、予は八十禍津日以下と天孫降臨とは、殆んど同時で有つたと想像するのである。而して其第一回の破壞にしても、其の威力が如何に猛烈で、如何に祖國の人々をして戰慄せしめたかは、其の當時猛きもの強きものに對して爆發を意味した語(火の神の條の如き)を以て、負はしたるによりても想見せられるのである。夫れが二回三回と續けて大破壞を受けるに至りては、蓋し思ふ可しで有る。其の南下したる琉球との交通が、久しく杜絕したるが如き、亦此の大破壞が一大原因を爲してゐるのであらう。

(ハ) 伊邪那岐伊邪那美二尊の大八洲經營の原因

二尊が大八島探險の使命を託せられた原因は、大事忍男神より速秋津比賣神迄の

神名によりて、充分に說明してゐるけれども、更に之を其位置の上より論ずるときは、愈之れが確定的のものたることを知るのである。或る一部の論者は、之を以て皇祖神たる日の神を生まんが爲めと、大八洲國は我が民族が、當然統治すべきもので有ると云ふことを、先天的ならしめ、一は以て異民族統治の宣傳政策に供し、一は以て皇室を尊嚴にせんが爲めの、作爲的遠征で有ると云つてゐるが、此の遠征は事實で有つたのである。皇祖神を生まんが爲めでもなく、宣傳政策に供せんが爲めの傳說的出發でもなかつた。我が祖先が移住地を得んが爲めの探險であつた。我が祖先は移住の地を求めねばならぬ境遇に在つたので有る。

我が大和民族(大八洲移住後の)は、元明天皇時代に紀記の一書が出來上つたに拘はらず、此の荒唐極まりなき神話をば、平氣で書く程の幼稚な時代に逆行してゐたので有る。然るに一方には遠き上代に於て、天神の條に見るが如き、堂々たる宇宙論を爲してゐるので有るからして、吾人が祖先の文化は、確かに退步してゐたので有る。即ち何千年かの上代に於ては、此の宇宙論を生む程の、文化に達した時代が有つたので有る。然らば其の時代は何時頃で有つたらうか、又其の文化は何故に堙滅したので有らうか、吾が國の學者が是等の點に着眼しなかつたのが、神代史の研究を不問に附し、若しくは神代史を以て我が祖先に關係のない作爲的傳說とした所以で有る。(祖國の風土の條に述べる如く、祖國が地震と火山と暴風とに緣有る言葉が殘つてゐる點より見るときは、火山の活動激しく從つて其の襲來する所の地震が火山性地震で、破壞力に富んでゐたことが想見せられる)現代より三千年の上代に遡りて、祖國の狀況を想見せんことは、我が民族史に依れば、頗る難事として現代の學者は多く其の不可能を說いてゐる。併しながら予は其史上に現はれたる所のものを集め、之を綜合して見るときは、略其如何を知ることが出來ると思ふ。やまと、山處、底つ岩根に宮柱太敷立てて高天原に千木高知り、或は伊邪那岐命が、日向に於て天照大神を生み、又須佐之男命が日向より高天原に入りたりと云ふやうな事を綜合して見るときは、祖國が日向を去る幾何もなかつたことと、殆んど日向の風土と餘り大差無かつたことが想見せられる。予は今茲に三千年前の九州が、如

何なる狀態で有つたかを考へて見やう。

九州は向日別向つ火の意筑紫)、豐日別(豐火で豐國)、建日向日豐久土比泥別(建る火向つ火豐奇し火根で火の國)、建日別(建る火で熊襲國)で、其の名が悉く火山に由緒ある名のみを附せられ、而して九州の山岳が殆んど火山を以て構成せられ、中にも阿蘇山の如きは、其の舊噴火口の大なる四里以上六里を有し、足利氏時代に書かれた太平記にも、其の光り三里を照したと有る又隋書に曰く

有阿蘇山、其石無故火起接天者俗以爲異因行禱祭

と隋煬帝は我が推古天皇の朝に當る。此の時代に阿蘇の噴火が傳へられてゐる。推古天皇以前には噴火しなかつたであらうか、我が神代史に言へる爆發は蓋し此の阿蘇を中心としたる大噴火であらう。此の隋書に記載せられたる所に見るも其上代に於て如何に猛威を逞うしたかが想見せられる。九州の中央を走れる山脈(即ち今の薩隅日と、肥後の國境を走れる山脈)は、殆んど火山で、夫れが一齊に活動した時を想へば、九州の南東部方面は、是等火山の山柱が天に冲して、成る程火の國で有つたらう。併し是等の火山も、一時は靜穩な時代が有つたことは、爭はれぬことで、其の靜穩な時代が、我が祖先の黃金時代で有つて、天神の條の文化を生んだので有らう。而して其の火山の活動期に及び、此に其の大破壞を受けて、祖先の文化を失つたので有る。(委細は天孫降臨の條參照)即ち我が祖先は火山地震の活動に堪えず、此に美地を求めて移住せんことを思ひ、斯くて二尊の大八洲の探險經營となつたので有る。

されば天照大神の勅によりて、第一番に移住の話が持ち上つたのは、天忍穗耳命の時であつて、此に天菩日命の中國下向となつたので有る。さうして祖國に於ては着々として移住の準備を爲しつつ有りし間に、一大爆發に遭遇したので有る。故に曰く「あれは降りなんと裝ひせしほどに御子生れましつ、御名は天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇々藝命」と、裝ひしほどとは、準備せしほどにの意で、裝束せし間の意ではない。斯くて我が祖先は其の目的地たる近畿に向ふこと能はずして、思ひも寄らぬ薩南に遁れたので有る。魏誌倭人傳に倭人が盛んに漁業をなした

ることを叙したのは、天宇受女命が魚類を集めて天孫に仕へ奉れと、宣告したると思ひ合せて、天孫降臨の一大危難に遭遇した民族が、食を陸上に失ひ之を海に求めたることを裏書したものである。されば火遠理、火闌理二尊相爭ふ時も、海神の援けを得たる火遠理命が勝利を得たる神話は、此の時代に於げる我が祖先が、專ら漁業によりて生計を營みたるを思ふべく、即ち海上權を得ることが勢力消長に至大の關係あるを物語つたものである。

(二)　天孫と木之花咲耶姫

木之花咲耶姫が、現在淺間神社に祭られて有る所より此の人を種々な方面の人に解してゐるけれども、此の人は矢張り九州南部の人で有つたと見ねばならぬ。木之花咲耶姫の父大山津見神と云ふのは、抑々何處の人で有つたらうか、此の大山津見と云ふ語の意は、宣長の說いたやうに大山津持ち若しくは予は大山津部かと思ふ、奄美大島之をアマミオホシマと云ふ、而して琉球ではアマミをアマメと云ふ、アマメのメはべの轉じたもので、アマベ即ち海人部である。然らば大山津見即ち大山津部、大海津見即ち大海津部である、此の二樣の解の內、何れを取つても、陸上の或る地方の統治者であつた人を、大山津見と云つたものである。されば、大山津見は我が古代日本の、或る地方地方には、必ず一人つゞ居たので有つて、(九州にも、近畿中國にも、又三宅島にも、大山津部は置かれてゐたもので、其長宮を大山津見神と云つたもので有る)大山津見神をば、一人と見ることは出來ない。又九州の全部が別の號を持つて居るのは、之れが後日の別部の本であつて、皇別を意味したもので有る。此の点から見るときは、曾國即ち建日別であるから、曾國の大山津見神は、皇別の人で、曾國の行政長官で有つたので、九州南部の名族で有つたことを知るので有る。即ち九州南部の皇族の女が、木花咲耶姫で有つたので有る。其の國する所の大破壞を受けて、移住す可く言向けたる近畿の地に向ふこと能はず、曾國に避難した、天孫瓊々杵尊を迎へるに、如何ばかりの意を以てしたかは

故れ其の父大山津見神に乞ひに遣はしける時に、太く喜びて其の姉石長比賣を副へて、百取の机代物を持して奉り出しき。

とあるに見て明白である。此の一節を結婚の結納、若しくは結婚式と見るのは大きな誤りで有る。此の結婚については、附會の傳說のあることに注意しなければならぬ。天孫がそじしの空國を國まぎとほりて、薩南に遁れ給ふたとき、如何ばかり困苦と窮乏とを重ねられたことで有つたらう、即ち此の一節は、薩南の皇族たる大山津見神が、天孫の勞苦を安んじ奉るべく、殊に心をこめて待遇し奉つたので、御結婚は其後のことで有ると見なければならない。鹿芦津姫は自遜の稱で有らう。又吾田津姫は、其人と成られた地名を云ひ、而して皇后となられてより、此に神吾田津姫と、神と云ふ語を加へたもので有る。又木之花咲耶姫と云ふ稱號は、其姫の麗はしかりしを稱へたるよりも、天孫が此に安居の國を得て、安堵し給へる御心地より大山津見神に報ふべく、此の姫に此の名を負はせ給ふたので、意は木の花の咲き出づるやうな暢やかな心持になつたと云ふ意で有らう。此の神を淺間神社に祭つてあるからと云つて、之を以て說を爲すことは如何かと思へる。其之を此に祭つたのは後日の事で、火山に緣があるからではあるまいか。

（ホ）彦火々出見命と豐玉姫及鵜草葺不合命と玉依姫　以上述べた外に猶輕視することの出來ないのは、彦火々出見命と豐玉姫、鵜草葺不合命と玉依姫の結婚問題で有る。奇蹟を解くことの愚なることを認めてゐる程の人は、亦豐玉姫が龍神の娘でもなく、將た又鰐でもなかつたことを認めるであらう。然らば此の豐玉姫と玉依姫とは、如何なる系統の人で有つたらうか、之を確めて置くことは、我が古代日本を研究する上に就て、最も必要なことで有らう、始め彦火々出見命に、海津見神の宮に行く途を敎へたのは、鹽推神（鹽土翁）で有る。鹽椎神とは何を云つたので有らうか、宣長は鹽椎のツチは、野椎のツチと同しく持ちの意なるか、ツはのに通ふ助辭にて、チは尊稱か、又は野の智と云はんか如きものかと云つて、知識大都知であると斷案を下してゐるが、頗る面白くない說である、知り大つちとは、何處に據どころありて知識とはつけたらう。吾人は全く解譯に苦しむ、鹽椎は宣長の最初の說のやうに、鹽津持で航海部の長官である。此の人の敎へによりて、彦火々出見命が尋ねた綿津見神の宮は、何處で有つたらうか。古事記に曰く

婢乃ち水を酌みて玉器に入れて奉りき。爾に水をば飲み給はずして、御頭の玉をば解して口に含みて、其の玉器に唾入れ給ひき。云々、故れ玉つけながら豐玉毘賣命に奉りき云々

と之れ實に琉球の一部地方に遺りて、今猶行はれつゝ有る結婚式である。又豐玉毘賣の產時に當り、產殿の屋根を葺き合へずして、鵜草葺不合命が生れ給ふたとある。而して琉球では家に姙婦があるときは、屋根を葺かない習慣がある。又琉球では兒が生れると川下りと云ふ儀式がある。先づ赤子に產湯をさせて、着物を被せ、其の上から小さな蟹を二三匹這はせる。一方我國では鵜草葺不合命生誕の話に「海濱立室于」時掃部連遠祖天忍人命供俸倍侍作箒掃蟹仍掌鋪設云々」と、此の沖繩地方の風俗が豐玉比賣によりて傳へられたのは、豐玉比賣が南方琉球方面の人で有つたからであらう、さうして見るときは、此に見はれた綿津見神は、當時少なくも薩摩の大島郡以南に居つた人で有ることは疑を入れぬ。さうして此の綿津見神は、瓊々杵命の妃木之花咲耶比賣の父たる、大山津見神と同格の人で、一方は陸上を一方は海路交通のことを、掌つてゐた人で有つたことが伺ひ知られる。さうして亦其の綿津見神が彦火々出見命を遇した條に。

此の人は天津日高の御子空津日高に坐せりと云ひて、即ち内に率て入れまつりて、ミチの皮の疊八重をしき、絹疊八重を其の上に敷きて、其の上に坐せまつりて、百取の机代物を具へて御饗して云々

果して斯うであつたかどうかは知らぬが、話半分に聞いても、非常な待遇で有つたことが思はれる。其の三年故郷を忘れ給うたのも、亦故ある哉である。而して此の婚姻は二代重りて、鵜草葺不合命と、玉依比賣との結婚となつたので有る。

(へ) 琉球及び八丈島の統治

然るに此に豐玉比賣の出產の狀を見られたるを恥ぢ「海坂を塞ぎて歸り入りましき」と云ふことが傳へられてゐる。之れは何を云つたものであらうか、此の言葉は此につく語ではなく、玉依比賣結婚後のことでなからねばならぬ。彼の稻飯命三毛入沼命の、或は浪の穗を蹈みて他に行き、又は母の國に往つたと云ふ話とを綜合して見たならば、思ひ平ばに過ぐるものが有

らう。

彼の木之花咲耶比賣を以て、三宅島に鎮座してある大山津見神の子とするものは三宅島に神社の數の多いことに原因してゐるやうであるが前にも述べた通り大山津見神は、之を三宅島にのみ求むべきではないのである。此の三宅島に古代の神社の存してゐることは、決して等閑視すべきものではない、此の如く大山津見神の社が、三宅島に存在してゐる所以のものは、我が古代日本の勢力が、遠くここ迄も及んでゐた、否全然我が祖先の版圖であつたことを物語つてゐるのである。さうして一方又琉球方面迄も版圖で有つて、其の主要なる地には皇族を分遣して、之れが統治を圖つたもので有る。而して其の交通路には、黑潮を利用したもので有らうとの說があるが、予は少しく之れに反對せざるを得ない、若し之を利用したのであるならば、海坂を塞いだ後と雖も、猶交通したことが多少は無からねばならぬ。又黑潮の潮流が、現今のままで有つたならば、ミチの皮が琉球にあるのは、誠に不思議である。ミチがアジカ即ち海驢なることは、學者の說の一定してゐることであつて、海驢は蓋し北海の寒流に產するもので、夫れが寒流に送られて南下し來るものであつて見れば、琉球邊り迄南下するとは受取れない。若し今の黑潮の水道が現在のやうでなく、他の方向に向つてゐたとすれば、北海より流れて來る寒流が、本洲に沿ひて流るる水道は、今少しく南下することとなる。さうすれば此の海驢も從つて南下することとなるから、之れが薩南の方面で獲れても、左のみ不思議でもないこととなる。又天孫降臨前後の火山の爆發は、實に八重山火山脈の活動であつて、此の大火山脈は九州以南に於て、黑潮の流れを通過してゐるのであるから、此の火山脈の活動は、海中の水道に於ても、屢々變化を生ぜしめたであらう、此の事は決して否定し得べき問題ではなく、最も可能性を有してゐるのである。且つ一度琉球に航した人は、大島以南の琉球諸島が、殆んど全部其斷層を見はしてゐることを見ては、予が此の疑問の一層否定し得られないことに氣がつくで有らう。而して此の琉球にミチの皮が有るのは、海上交通に依つて得たものとして見ても、益々琉球九州及三宅島とが、同一勢力の下に統轄せられてゐたことが明らかとなる。又魏

志倭人傳に、韓國南部は倭國に接すと出てゐる處から見るときは朝鮮の南部は我が版圖で有つたことが判明する。此の如く見來れば、我が古代日本の勢力は頗る強大であつたことを思ふのである。然るに夫れが一時琉球とも、韓半島とも、三宅島とも交通を絶つた所以のものは何であらうか、豐玉比賣の條の海坂を塞いだからである。然らば其の海坂を塞ぐとは、何事を云つたものであらうか、之れ海路の一大變化による交通杜絶か、將た又祖國分離の一大悲劇かであらねばならぬ。此の兩者何れであらうか。

（ト）琉球の離反　或る一部の學者は、九州の勢力が我が近畿迄をも支配した事實はない、之れから見ても、九州南部に主力を置いてゐたとは受取れないと云ふ說を立ててゐるけれども、之れは古代日本の交通狀態を研究しないことから起つた謬論で有る。我が古代日本の交通は海路で有つたか、陸路で有つたかを、第一に考へねばならぬ。古代神社の多かつた地方は、古代の繁榮を物語つてゐるもので今之を擧ぐれば、壹岐對島出雲伯耆三宅島等である。而して九州南部に神社の少いのは、前に述べた大破壞の結果であることを思はねばならぬ。亦近畿に神社の多いのは、久しく帝都の所在地であつた爲めに、其祖先の祭神を此の地に移し祭つた結果であるから、之を以て古代文化を說明するには足りない。即ち先きに擧げた各國に就て之を研究して見る。韓國及び裏日本との交通の要衝に當るものは對島である。即ち裏日本、韓國、對馬、琉球、三宅島と交通線を描いて見ると、何處か一番便利であるかと云ふことが判る。若し近畿に首府を置いたらばどうで有らうか。山野未だ開けず、其交通の不便なる、到底琉球、九州、韓國及び三宅島等を、統御することは出來ないであらう。我が歷史は明白に此の事實を物語つてゐるではないか。大和奠都以來、九州の狀況は如何、琉球は如何、韓半島は如何、三宅島は如何、九州は久しく其首府の所在地で有つた餘威によりて、版圖では有つたが、叛服常なく頗る手古摺らしたではないか、其他に至りては忽然として勢力圈外に逸し去つたではないか。之れと反對に、大和朝廷の勢力は、其陸續きの本州の東西に向つて伸長したのである。之れ其の交通が海上より、漸く陸上に轉じたことを立証すると

共に、古代日本の版圖と、大和朝廷の版圖に多大の差異を生じたのである。其の勢力の如何によりて、其の首府の所在地亦自ら變化するのである。即ち韓半島南部と、壹岐、對馬、九州、琉球、三宅島等を統治するには、水路の便から見て、どうしても九州でなからねばならぬ。而して其の要所々々に大官を置いて、之を治むることは、尤も策の得たるものである。故に九州の四面に皇別を配置し、而して薩摩の大山津見神、琉球の綿津見神、大海津部、三宅島の大山津見等と、相連絡して統治してゐたのである。之れによりて見るときは、先きに擧げた地方に、延喜式に載せられた神社の多い理由も、亦自ら判明する。而して此に豐玉姫の傳說の中に海坂を塞ぐとして、交通の斷絶を宣言してゐるのは、其の原因が海路の變化によるとしても、其の他の事情が有つたとしても、我が日向日本が或る地方に於ける、統治權を失つたことを說明した言葉で有る。即ち神武天皇の皇兄たる、稻冰命、三毛沼命の事を叙して曰く

御毛沼命は、波の穗を踏みて常世國に渡りまし、稻冰命は、母の國として海原に入りましき

とあるが、之れは何を物語つてゐるのであらうか、日本書紀の傳によれば、恰も朱蒙の事が混入してゐるやうに見えるが、古事記に由れば日本書紀程三韓化してゐない。波の穗を踏みて常世の國に入りましきと云ふのも、母の國として海原に入りましきと云ふのも、意味は同じことで、祖國たる日向朝廷より分離せられたので有る。即ち御毛沼命、稻冰命の祖國分離と、豐玉姫の海坂を塞いだと云ふのは、一貫した同一の意義を傳へたもので有らう。若し之れが爆發による地殼の變化より現はれたる、交通斷絶で有るとしたらば、海坂を塞ぐとは、天孫降臨直後のことで有らねばならぬ、夫れが時代後れの鵜草葺不合命以後に起つてゐるのであるから、交通斷絶は外に意味が有るので有る。之れ即ち琉球の大海津部の離反を物語つてゐるので有る。

天忍穗耳命以下近畿に向つて移住すべく、着々として計劃の歩を進めてゐたのが一大地變に遭遇して思ひも寄らず南方に移住したのであつて、其の損害は決して

少々のものではなく、今迄解説し來つた意味さへ不明に陷る程であつたから、其の破壞は實に想像の外で有つたらう。即ち其の國力も非常に衰退したのである。故に一時非常に好意を以て迎へた大海津見も、日向朝廷の內情が判明すると共に此に日向朝廷に反抗の態度を示したであらう。よし反抗しない迄も却て日向朝廷を凌ぐに至つたことは、神武天皇の條に

「神倭伊波禮毘古命、其の兄五瀨命と、高千穗の宮にまし〳〵て議り給はく、何れの處にまさば天の下の政をば平けく聞こし召さむ云々

とあるに見るも明白である。此の語は實に國家統治の上より發せられたものである。火山の爆發によりて移住地を求めたるとは、全然趣を異にしたものである。即ち本來の近畿移住の目的と、神武天皇の東征とは、全く其の目的が一變して來たのである。是れ蓋し外部より來る壓迫の爲めに移住を餘儀なくさせられたので有ることが知られる。然らざれば前掲の神武天皇の語は發せられない。是に於てか御毛沼命、稻冰命の離反は其の外戚たる大海津見に歸せられた事で、海坂を塞ぐとは、大海津見の離反であつたのである。而し大海津見の離反と共に海上交通權を失つた日向朝廷は、其の存在すら危くなつたので、此に神武天皇東征の大英斷となつたのである。

第四章　神代の祖國

一　大和民族の祖國

(イ)　祖國の名稱

古來我が祖先の祖國を說くに、高天原を以て、其の名稱としたゐめに甚しい誤解を來したのである。富士山說の如き皆之れから來たもので有らう。たかまがはらのまは、祖先が敬語若しくは、贊美の語に使用したので有るから、たかはら、即ち高原であるとして、此の說を生んだので有らうが、高天原は、何處々迄も高天原で、後の天の原、大空間を云つたもので、「高天原に神とどまりまします」とは、今日の語に換へて言へば、祖宗在天の靈と云ふ意である。又「高天原に千木高知り」と云ふのは、千木の高く空に聳えたのを云つたのに過ぎない。古事記「の天地の初發の時に、高天原にあれませる神の御名は」と云つた、高天原は、大空間を云つたので有る。是を國名としたのは、後人が高天原の意義を知らず、地神の條に、天に上るだの、天下るなどの言葉が有るが故に、之を天上に國が有つたと、思つたからして起つたことで有る。

上述の如く、高天原と云ふのは、我が祖先の祖國の名稱ではなかつた。然らば、其の祖國の名稱は、何で有つたかと云ふに、遺憾ながら傳へられてゐない。只一つ、予は、此に疑を存してゐる。夫れはやまとと云ふ名で有る。伊邪那岐伊邪那美二尊が其の理想の土地として命名したのが、大倭秋津島であり、而して、又、神武天皇奠都の地を大和とした。此の大倭のやまとと奠都の大和とは、第一場所が違ふばかりでなく、廣さが異なつてゐる。元來やまとと云ふ言葉が、山處の意であつて、大きな山の有る處を云つたので有る。されば、平坦な近畿地方、殊に現在の大和地方とは思はれない。是れがやまとと云ふに名ついて、疑義の生する所以で有る

(ロ)　祖國の風土

今迄の學者は、祖國を以て、朝鮮と云ひ、中央亞細亞と云ひ、琉球と云ひ、臺灣と云ひ或は印度、或は南洋、甚しきに至りては、地中海說をさへ爲すものがある。此の如く、異說紛々としてゐるけれども、未だ以て、吾人をして、滿足せし

むる程のものがないのは、祖先の言葉を基とした、祖國の風土に就ての研究が、疎かにして有るからである。此の風土に對する研究の如何によつては、直ちに、祖國の位置を、推定するに足るので有る。氣温に付いての言葉はないが、近畿地方を指して「豐葦原の千秋の長五百秋の瑞穗國」と云つてゐる。此の「千秋の長五百秋と云つたのは、稻田豐熟の、贊美の語と許りは、見ることは出來ない、秋らしい氣候の長きことを、意味したもので、即ち其の祖國よりは、春秋の期節が長かつたから、千秋の長五百秋とつづけ、夫れが一轉しては、即ち稻田豐熟の贊美をも、意味することとなつたので有らう。尙ほ又、春秋二期に、祖先を祭つた遺風より見る時は、四季の區別は有つたので有る。されば、近畿地方よりも、温暖な地方で有つた事が推定される。而して其の地味は、決して肥饒ではなかつた。天祖託宣の語は、之を証明して餘り有るので有る。「豐葦原の千秋の長五百秋の水穗の國は、吾が御子正勝吾勝々速日天忍穗耳命の知らさむ國なり」と、即ち知る、祖國が若し饒なりしならむには、豐葦原の瑞穗の國として、憧憬ることは無かつたので有らう。爾く、大八洲を贊美した所以のものは、祖國が瘠土なりしことを。而して又我が祖先が云つた言葉に、「底つ岩根に宮柱太敷立てて高天原に千木高知り」と言つたのは、何を意味した言葉で有らうか。今迄の解說によれば、上代の建築は、皆掘り立小屋式の方法で有つたから穴を深く掘つて、柱を立てることを形容して、爾く云つたもので有ると、云つてゐるが、之れは大なる誤解では有るまいか。其の「底つ岩根に宮柱太敷立てる」のは、祖先が地震に敎はつた、建築法を言つたもので、上代に在りては、今日の如く、洪積層等と云ふ言葉が無かつた爲めに、其の經驗によりて、底つ岩根としたので有つて、今日の洪積層を指したもので有る。最も、百年に一回とか、八十年に一回位の、地震で有つたならば、今日の如く科學の進步してゐた時代では無いからして、如何なる地質の場所が、建築に適してゐるかを知ることは、頗る困難な事で有るけれども、家屋の倒壞するやうな地震は、頗る頻繁に襲來したので有る。其の頻繁な地震の襲來によりて、目擊し經驗した所から、底つ岩根に宮柱太敷立てて、倒壞の慘害を、少なくすることを知つたので有る。（最も之れは祖國の末期）さうして此の地震は、火山の爆發

による、破壞性に富んだもので有つたことが、想見せられる。（天孫降臨の狀參照）而して、鰹木によりて、風を防いだ、此の鰹木も、今日神社の屋上に見る、數本の木ではなかつたらう。其の美觀を損せぬ限り、力めて多くの木を置いて、風を防いだもので有らう。されば、屢々暴風の襲來をも、受けたもので有る。火山、地震、暴風、見來れば、祖先の祖國は、決して肥飫の土地では無かつた。其の近畿中國の地を指して、うまし國とし、瑞穗の國として、贊美したのは、實に無理ならぬあこがれで有る。是等の點より見て、今迄の學者が推定したのは、一つも其の當を得たものはない。

（八）我が祖先　竹越三叉の二千五百年史、一たび出でて、我が祖先を、南洋の漂流民と斷じてより、天下翕然として、此の說に誤られたので有る。此の說一たび出でてより、又青年々、自己祖先を崇拜するものなく、自ら侮りて南洋蠻人の漂流となし自己民族獨創の、文化なしとなし、徒に、西洋思想に追隨して、尠なからず、愛國心を消滅せしめたのである。予は今一二例を擧げて、此の說の妄を開かう。

太古遊牧民が水草を追ふて、移住した時代に在りては、其の民族としての移住も、盛んに行はれたので有らう。又其の相攻伐するや、敗亡せるものは遠く追はれて、此にも亦、移住が行はれたので有らう。人文漸く進むに從ひては、移住地を求めて、移住したものも有らう。若しくは、或る天災地變の爲めに、其の祖國を去りて、居を他に求めたものも有らう。然し其の何れにしても、太古民の移住は、陸地の相接續する處か、海を隔つると云つても、呼べば答へん許りの、近き處に限られてゐたので有る。雲煙渺茫たる大海に、當ても無く、乘り出したといふやうなことは、絕對に無いので有る。然るに、我が祖先のみ、獨り、南洋から漂流したので有らうか。南洋土人の舟は爾く遠洋航海に堪え得る程度に、進步してゐたので有らうか。若しも、夫れが遠洋航海に堪え得るやうな舟で有つたら、何故に、今日南洋には、其の進步の徵すべきものが無いので有らうか、如何に漂流とは云へ、其の舟が、已に漂流に堪え得ないので有る。此の点のみよりしても、南洋の漂流民とは信ぜられない。且つ印度、若しくは、馬來半島あたりの、人間としたら、何の求むる所が有つて、大海を漂流したので有

らうか。或は、漁民等の漂流と云ふのでありらうが、漁民にしても、何にしても、二千年以前の舟を以て漂流するには、餘りに遠隔に過ぐるのである。如何に、黒潮の流れを利用しても信ぜられない話である。臺灣に上陸し、更に北上して琉球に、而して更に亦本邦に漂流したとも云つてゐるが、我が祖先は、さう性懲りもなく、一度ならず、二度ならず、三度迄も、漂流するのであらうか。是れは首肯し難い、强辯である。況んや、桑田變じて碧海となる。今日の滄海、必ずしも昔日の碧海にあらず。黄河は、陸上の低地を流れてゐながら、屢々其の流域を變じてゐる、海中の黒潮、獨り二千年の流域を、墨守してゐるのであらうか。夫れ許りではない、琉球語が其の然らざることを證明してゐる。琉球語では北をにしと云つてゐる、ニシはいにし(去にし)の略である、去にし國を指したのである、自己の本國を云つたのである。其本國が北方なりとすれば、却て我が民族が南下したものではないか。我が天孫の降臨は決して南洋蠻人の漂流したものではない。自ら侮るを止めよ當時の我祖先は天神時代に現はれた、堂々たる宇宙觀を述ぶる程の文化を持つてゐたのである。

然らば何處から、加世田方面には來たものであらうか。即ち祖先の祖國は何處で有つたらうか。

(二)祖國の位置　天孫が遠く南方に走つたと云ふことから、推察すれば、高千穗を去る決して遠隔の地ではなかつた。殊に記には高千穗のくしふる岳と云ひ、紀には天降於日向襲之高千穗峯矣既而皇孫遊行之狀也者則自穗日二上天浮橋立於浮渚平處而膏肉之空國自頓丘覓國行去云々」と出てゐて頗る怪しく成つてゐるけれとも、紀の穗日は奇火で噴火を云つたものである。又記のくしふる岳は奇振る山で、やはり噴火による地震を云つたものである。されば霧島高千穗の如き、盛んに噴火し活動してゐたことが想見せられる。さうすると霧島高千穗附近が祖先の祖國で有つたと云ひ得るのである。殊に一火山の活動は、其の火山系全部の活動を誘發するのみならず、延いては之に近い他の火山系の活動をも誘發し、加之地震帶の活動をも激發するのである。して見れば此の最大なる阿蘇の大活動は、如何許り猛威を逞ふしたので有らうか、高隈、高千穗、霧島、等の連續的噴火は、我が祖先

の祖國をして熔岩と火山灰に掩はれて、之れについで大地震と大海嘯起り、所謂空國となして終つたのである。今迄の學者は天孫降臨の際に見はれてゐる「天の岩倉放ち、浮きじまり、外り立たし、奇振る(震る)、そじし、から國、底津岩根に宮柱太知りなどの言葉、向日別(向つ火)豐火別(豐火)肥國(火の國)、建日向日豐久士比泥別(建火向火豐奇火根)、などの地名及び忍穗(忍火大火)、天邇藝志國邇藝志天津日高日子番能邇々藝(天賑し國賑し天津火高日子火の賑賑し)火照、火須勢理(火すさび、火進み)天津日高日子火々手見(天津火高日子火火根美)、空津日高(空つ火高)などの神名をば、火に緣有る言葉と見ずして、日に取りたるが故に、火の國の名が、不知火から起つた位に解いたもので、火山に關する考へを少しももつてゐなかつたので有る。而して彼の向日別以下の國名は、伊邪那岐伊邪那美二尊が命名されたものではなくして、矢張り天忍穗耳命以下の御名が、後人(後人と云つてもさう餘り飛び離れたのではなく、天忍穗耳命の名は火明命の時代から、火明命の名は邇々藝命時代からと云ふやうに)が着けたので、二筑地方の向日別は此の火山に向つてゐると云ふ意である、又豐前豐後地方には火山が稍々多い、由布、鶴見皆さうである、故に豐火である。肥の國即ち火の國肥前、肥後、日向(火向)には、肥前に溫泉多良の二山、肥後では薩隅日の國境を走れる山脈は、殆んど火山ならざるはなく、其中にて阿蘇山は其最も大なるもので、其他日向に入りては、九重等尤も大なるものである、故に建火向火豐奇し火の根の國である。又大隅薩摩地方には、霧島、高隈、櫻島等が有るから、建火とつけたので有つて、朝日のい向ふ國なるが故に、日向ではない火山で火に對して言つた日向即ち火向であるか、若しくは山田孝雄先生の說の如く、琉球語の東をヒガと云ふより起れるものであらう。是等は皆火山の活動を見て、名づけたもので有るからして、其火山の全盛期は推測せられる。我が祖先の國が、所謂火の國中央部に在つたので有るとしたら、其破壞は蓋し何物をも殘さなかつたので有らう、天孫が其民族を率ゐて加世田に逃れたと云つても、其れは百分一にも足りなかつたのである。斯くして吾人が祖先の文明は破壞されたのである。けれども其宇宙觀より來つた人生觀と其大思想とは、稗田阿禮等の努力によりて、斷片的にも之を窺ひ得るのは、不幸

中の幸と云はねばならぬ。

（ホ）**別**　又我が上代に於て別部の制があつた、此の別とは皇別を意味した言葉であつて、それが地神の條で九州が一番多い、即ち向日別、豐日別、建日別、建日向日豐久士日泥別として、全部が皇別の統治を示してゐる。而して建日と向日と豐日とを合せたものが、建日向日豐久士日泥別で有る、（宣長のやうに建と離して、日向日と續けては不可ない、建日と續け、向日と續けるのである）而して薩摩を背（ソ）とし、日向を東とした所から見るときは、其の本國は即ち九州の中央部で有りはしなかつたかと思はれる。

（ヘ）**襲の國**　襲の國と云ふことに付いて宣長は「曾と云ふ名の義は、古語拾遺に「天鈿女命古語天乃於須女、其神强悍猛固故以爲名、今俗强女謂之於須志此緣也」と見え、源氏物語帚木卷に「かくおぞましくは、いみじき契り深くとも、絶へて又見じ」と、見え、俗語にもおぞき、おそろしきなど云ふ、きれば曾は此の於曾の約まりたるにて、是も猛き意なるべし。書紀に襲と云ふ字をしも用ゐられたるも、本言於曾なる故なるべし。又思ふに曾は勇男（イサヲ）の約まりたるか、佐乎を約むれば曾にて伊を略くは常なり、書紀に渠帥をもイサヲと訓めり、又功をも伊曾と云ふを思ふべし（書紀仲哀の御卷、神依の言に、「彼の國のことなりと見えて、神代の卷に、膂之空國自二頓丘一云々とあり、此の膂より出たるかとも思へど、是より其の名にもなりの御世に既に熊襲建の名あれば然にはあらず」）さて筑紫の島を四つとして、其の一ッを熊曾國と云へるは、後の日向の南の半國ばかりより、大隅薩摩の地までをすべて云ひし上代の大名なり云々」と云つてゐるが、曾と云ふ名の義は少し異なりはしないか、曾は割註に有る如く、そじしの**そ**とするのが當を得てゐる、そししの**そ**、そがひの**そ**、そびらの**そ**、そむくの**そ**など皆同じ意で有る。そは脊と云ふ意で、之を以て直ちに不毛とは解けない、不毛はそじしの空國、若くは記のそじしの韓國である。そと云ふのは脊即ちうしろで、曾の國の曾はこの意味で、そじしから出たそではない。そじしの**しし**は、肉のししで、**そ**と**しし**の二つか合つて、そししと云ふ言葉となつたのである。曾の國は之れとは異なつて、脊の國、うしろの國、祖國の脊に當る國の意である。之れによりて見ても祖國が火國の中央部に都してゐたことが想見せられる。且つ先に述べたやうに朝鮮新羅の始

祖赫居世が天照大神の意譯であるに拘はらず、之に弗矩内王(火國王)の名あるによりても、火國の一部であつたことが、想見せられる。

(ト)　**我が祖先と太陽**　我が祖先の南洋説を爲す者は、又我が祖先が、太陽を崇拜したことを擧げてゐるが、我が祖先のみに限らず、南洋、印度、其の他多くの民族が太陽を崇拜してゐる。併し我が祖先が、太陽を崇拜したのは、南洋人等の太陽崇拜とは、頗る趣を異にしてゐる。上代に於ける、他の民族が、太陽を崇拜したのは、何と云ふこともなく、之を恐れ之を拜したに過ぎない。我が祖先が、之を崇拜したのは之によりて、以て常に或るものを捉へて、之を心の上から放つきいとしたのである。天照大神は、太陽其のものを云つたのではない。又天大日靈貴神、一人を云つたものでもない。之れは、我が祖先の祖國が全盛期に達した時の、君主を賛美して云つた言葉で、今我々が朝夕拜する所の天照大神は、祖先歴代の至尊である、其の天の下知ろし召す樣が、太陽の至り至らぬ隈なきが如く、其の德化の盛大なるを、表象したもので、夫れが後には、君主の別號と成つたものである。即ち太陽を借りて、或る偉大なる、人格を見はしたもので有る。既に本書の始めに述べたるが如く、凡てを建設し、凡てを抱擁するのが、我が祖先の理想とする所であつて、此の意義を最も痛切に地上の生物に感得せしむるものは、太陽で有る。其の光の至る所、凡てのものが其の澤に浴し、之を親しみ、之を愛してゐる。其の光は、何物をも差別しない。自なく他なく、凡てを抱擁して、自由に其の惠を取らしめ何の束縛する所もない。自由で有り、平等で有り、平和で有る。是れ、即ち、愛の極致である。自由平等の天地に、人類愛を高唱して、世界の平和を建設せんとす、之を表象するには、太陽に如くものは無い。我が祖先が、之を象つて以て、天照大神と云ひ、其の大思想を表現したのは誠に相應はしいことで、南洋の人の崇拜とは、別天地の相違で有る。

(チ)　**偶像崇拜**　偶像崇拜と云ふことは、西洋人等は、野蠻人の行爲として、色々と論議してゐるが、西洋人が、十字架を禮拜し、若くは、亞米利加人が、十字架のみで飽足らずして、國旗迄も禮拜するのは、一種の偶像崇拜ではないか、予は決して、偶像崇拜を以て野蠻行爲なりとは云はぬ、只其偶像崇拜が、偶像其のものを拜するのみなら

ば、誠につまらぬことで有るが偶像を崇拜するのは、偶像其のものを崇拜するのではない。偶像を通して、或るものを掟へるので、此に意義を生ずるので有る。古英雄を崇拜するのも、古英雄であるからとして、之を崇拜するのみでは、何にもならない。古英雄の心事を以て、心事と爲す所に價値が有る。我が祖先が、天照大神を崇拜するのも、實に此の意味に外ならない。

而して、予は更に思ふ。世界は一度は必ず何者かに統一せられねばならぬ。彼之を統一するか、我之を統一するか。之れは、最も偉大なる思想を有し、之に向つて勇往邁進する所の民族が、之を統一するので有る。其の祖先が、如何に偉大にして、眞理を体得した民族で有つても、其の民族が、子孫を通して、其の祖先の体得した所を、繼承して行かなかつたなら、折角の祖先の努力も、何の用をも爲さない。之を印度に見よ、支那に見よ。彼等は、彼程立派な文明の所有者で有つたに拘はらず。子孫を通して、祖先の大精神を繼承することが、出來なかつた爲めに今日の如く、或は滅亡となり、或は衰退萎縮となつたのである。是に於てか吾人は、大に祖先に感謝すると共に、此の祖先の大思想を繼承し、之を恢宏せねばならぬ。而して祖先は、吾人に其の表象として、最も大なるものを殘した。西人の十字架も、印度の佛像も、米國の星條旗も、我が天照大神に比すれば頗る小さいので有る。佛も、十字架も、之には一々其の理由の説明を付けなければ、其の意味を表現する上に就いて、多大の不便を感ずる、殊に星條旗の如きは、更に多大の不便を有してゐる。然るに、我が天照大神は、直に之を表現して餘す所がない。見よ其の無明を照らすとき。何物も之を遮ることは出來ない、月も星も凡て其の光を失ふではないか。而して凡ての生物を其の大光明の下に抱擁する。之には何物も企て及ぶことが出來ない。吾人は祖先の理想を体得する上に就いて、最も多大の便利を得てゐる。吾人は奮鬪努力以て祖先が寄託した、世界統一の使命を果さなければならない、(我が祖先の宗教及天神の條參照)

(リ)　其他の學説　或は臺灣の山中に住する、土人の發音服裝と、南洋人と我が祖先の發音と服裝と、多少の類似点有りとして説を爲すものもあるが、其の發音服裝

は共に太古の發音服裝を比較して論を爲してゐるので有らうか。彼の發音服裝は、現代を以てし、我の發音服裝は、太古を以てしてゐる。彼の發音服裝は、數千年の間、少しも進歩も、變化もなかつたらうか。彼等としても、進化もしたであらう。變化もしたで有らう、其の進歩し、變化した所のものを比較して、遇然にも類似してゐたからとして、直に之を以て、我が祖先は南洋人なりと斷定することは、甚だ輕卒の行ひで有る。又或るものは、印度アリアン族の骨格が、我が民族に似てゐるとして說を爲してゐるが、之れも二千五百年前の彼我の骨格を比較しての上でなければ之を以て認定の材料とするには足りない。況んや我が祖先の文化は世界の他の民族が持つて居ない文化であるに於てをやである。(祖先の宗教天神の解說及祖先の文化の條參照且つ我が大和民族は今日已に非常な雜種となつてゐる。此の雜種たる吾人の祖先が何種に屬するかを知らんとするには、多少の器物や發音服裝習慣等の類似によりて、直に斷定を下す譯には行かない。我が國には漢人も來てゐれば、秦人も來てゐる、其他穢族、狛族、肅愼族も來てゐる、又アイヌもゐる。是れ等の民族が渾然として同化し、今日の大和民族を形成してゐる、されば我が上代の古器物には、是等の民族の器物が雜然として混入して居り、其の他言語發音服裝習慣等亦然りである。故に今之れ等のものによりて、我が祖先を亞細亞大陸より來れりと云ひ、或は南洋より來れりと論ずるも、其の亞細亞系或は南洋系のものが果して、我が祖先のものであらうか、頗る疑なき能はずである。されば我が祖先民族が何種に屬するものなりやを研究せんには更に廣く人類學上より、本州四國九州の全土に亘りて、住民の骨格血液を檢査し、之によりて前揭の考古學上の材料を參考として、研究の歩を進めねばならぬ。近々十數名の血液や骨格を檢べた位のことで、我が祖先民族に對して斷案を下すのは、早計たるを免かれない。

二　我が祖先の文化

先きにも述べたるが如く、竹越三叉の二千五百年史一たび出でて、我が祖先を以て、南洋の漂流民なりと斷じてより、天下翕然として此の說に誤られ、我が祖先には、自

己獨創の文化が無かつたとして、我が天神七代の如きは、措いて顧みる者も無い有樣で有つたが、何ぞ知らん天神七代には上述の如き立派な議論が織り込まれてゐたので有る。而して此の宇宙觀は今より千數百年前(古事記編纂時代)の、我が國に於ける漢學佛敎の力を以てしては、到底言ひ得べき議論でないことで有つて、之れこそ實に我祖先が日向朝廷以前より言ひ傳へたもので、我が民族獨創の見解で有る即ち我が祖先の文化の一部が傳へられたもので有つて、之に依りて以て我が祖先の文化を攻究せねばならぬ。應神天皇の朝に於ける漢學渡來以前は、實に我が文化の闇黑時代とも云ふ可き有樣で有つて、何の思想も持たなかつたやうに思はれる、其の時代に儒敎を輸入したので有るからして、一も二もなく儒敎かぶれがしなければならぬ。さうして夫れがやがて我が國民性となつて、唐風排斥の聲などは起らない筈であるのに、平安京時代に早くも唐風排斥の聲を聞くに至つたのは、其闇黑時代を經過しながら、猶我祖先が遠き昔より傳へた或るものが、國民性の上に深く深く刻み付けられて、夫れが不知不識の間に我が大和民族の血脈に流れて居たもので有ると云はねばならぬ。夫れは何物で有らうか、之れ即ち我が祖先の理想の閃めきで有る。

(イ) 祖先の宇宙觀と道德觀念

我が祖先の宇宙觀は乃ち其道德觀念の出發点で有る。我が祖先は人の如何なるものであるかを研究し、而して人其もののの過去に向つて研究の歩を進めた、さうして其宇宙觀に到達したので有る。以爲へらく凡てのものは皆自然の力によりて創造せられた。即ち自然は凡てを生んだ凡てのものは自然の子である。而して自然の建設は平等で有る、さうして我々にも亦建設すべく、凡べての力を與へた。吾人は自然の子として、此の與へられた所のものを以て、自己を建設し將來を建設す可きで有る。人としてのものは、皆同一意義の下にあらねばならぬ。人としてのものが、凡て此の目的を達するには、何うしても平和で無からねばならぬと。此の祖先の思想を更に語を代へて言へば、自然の繼承と建設で有る。自然の同化で有る。神人の一致で有る。故に天神七代か其全部を通して自然贊美の聲で有る。我が祖先は自己を建設し、將來を建設す

ることを以て、自然を繼承するものと爲し、自然を繼承することを以て、自然の同化と爲し、神人の一致となし、而して人としてのものは地上の全人類を擧げて斯くあらねばならぬとした。此の如き思想を有してゐたからして、自由を樂しみ平等を謳歌し、自由平等の天地に人類愛を高唱し、世界平和の建設に向つて進んだ。故に曰く

狹國は廣く險國は平けく、遠つ國は八十綱打ち掛けて引き寄することの如く云々

と、何といふ美しい言葉で有らう、語中些の干才の音を聞かずして、世界統一世界平和建設を高唱してゐる。三千年の上代に於て此の如く美くしい思想の下に統一せられて進展した民族が何處に有らうか。

（ロ）三聖の教義と祖先の教義　道を說く基督の如く人を愚にしたものはない。又孔子の如く人間味の勝つたものはない。而して釋迦の如く人間離れのしたものはない。唯我が祖先のみ能く此の超人間と人間とを融和せしめてゐる。

若し釋迦をして我が祖先の此の敎を知らしめたならば、忽ちにして八萬四千の法門を棄てて、人間としての活動を說いたで有らう。孔子をして之を知らしめたならば、直に筏に乘つて我國に遁れたで有らう。基督をして之を知らしめたならば忽ち其假定神格を棄てて終つたで有らう。基督は其當時の爭鬪攻伐を如何にして止めしむ可きかに苦心した。而して平和は愛を以てのみ之を得らるべしとなし、茲に全知全能の假定神格を捉へ來つて說を爲した、曰く凡てのものは神によりて作られた、吾々は神の御心に從はなければならぬ、然るに我々は不知不識の間に神の御心に背くやうなことをしてゐる、誠に罪の子で有る。併しながら神は何處迄も我々を愛して下さる、其犯した凡ての罪を神の御前に懺悔して神の許を乞ふ時神は凡てを許されると。之を說くに理窟は何とでも付けられるで有らうが、誠に人を愚にした說き方で有る。全知全能の神が有るで有らうか、其說く所の出發點が假定で有るならば、眞理は人々の假定によりて生するものである。此の如く人々の自儘勝手な假定によりて生るるやうな理窟は、縱令んば遇然にも夫れが眞

理に合つてゐても之を以て眞理と認むることは出來ない。基督の說く所は方便教で有る。故に西人も亦之を一時の方便に利用してゐる。口には能く平和を唱へ愛を說くけれ共、實際は嫉妬排擠を事とし、盟に背き約に違ひ、人の國を奪ひ人の地を掠めて少しも耻つる所がない。而して十字架の前に於ける朝夕の禮拜に曰く、天にまします我々の神よ、願くば我々を助け給へと、何と云ふ虫の好いことであらう、此くては基督教國には幾千萬年を經過しても、眞の平和は建設し得られないで有らう。孔子が儒教を說いた其學說の根源は、天命之謂性從性之謂道由道行之謂教と云ふに有るが、孔子が餘り人間にのみ嚙り付いた爲めに、其道德觀の根據が其民族に明瞭りしてゐない、故に孔子が言つたことを惡いとはしてゐないが、實行力がない。見よ孔子は性相近矣習相遠と云つたのに、孟子は性善說を稱へ、荀子は性惡說を說いた。而して其末流の徒は孟子は孔子を祖述したものと爲し、荀子を以て邪道に落ちたとしてゐる。近來荀子を辯護して時弊を救はんとした一時の方便說なりとしてゐるものも有るけれども、抑天命とは何を言つたもので有らうか、天命即ち性で有るからして、性は是非善惡の外に超然たるもので有る。されば性を論ずるには、是非善惡を以てすることは出來ない、故に孔子は性相近矣と云つたのである。孟子の性善說も、荀子の性惡說も之れとは大に異なつてゐる。此の如く孔子を去る未だ遠からずして、早くも誤解を生じたのは、子罕曰性與天道と云へる如く、孔子が餘りに現在に急にして、其根本義の解說を充分にしなかつた爲めで有る。而して彼も人なり、吾も人なりと云ふやうな思想のみ深く印せられた、夫れ故に支那人は互に競爭し、爭鬪して遂に今日のやうな有樣となつたので有る。釋迦は孔子とは正反對の道を辿つた。故に人間離れがして、人のことが留守になつた。釋迦は飽く迄も眞理を知らしめやうと力めた。即ち其民族をして悉く釋迦たらしめやうとした。故に其說法にも今の人間は魚の春中のみを知つて頭と尾とを知らない、自己と云ふ現在のみを知つて、其過去と未來とを知らない。其過去を極め、其未來を知れと說いた、爾來三千年彼のアリアン人は、之が解決に沒頭して又他を顧みなかつた。さうして自己の人たることをも忘れて、一意專心沈思默

考して、以て如來の眞實義を捉へんとした。かくて彼等は眞理の大洪水に遭つて眞理に溺れて終つた、夫れが爲めに折角の哲理も、八萬四千の法門も其民族國家を救ふことが出來なくなつた。是に於てか、我が民族の祖先は實に偉大なもので有つたことを知るのである。火にも燒けず水にも溺れず、幾多の宗教思想を凌駕して、吾人の血管には、此の祖先の思想が高鳴つて居るので有る。何故に我が祖先の教義のみ、彼の闇黑時代を經過したるに關はらず、爾く力强く吾人に遺されたので有らうか。是れ即ち我が祖先の教義が、夫れ程力强いもので有つたからである。我が祖先の教義は大宇宙即ち眞理、眞理即ち人たることを說破してゐる。我が國の古語に神ながらと言ふ言葉がさうで有る、後世之に道と云ふ字を加へて、神ながらの道と云ふやうになつて、神世からの道と云ふ意味に用ゆるやうになつたのであるが、神ながらと云ふ意は、神即ち人、人即ち神、即ち神其ままの意で、主体の具体化したものが人であることを示した言葉である、されば人は先天的に神人一致である。故に人が人として爲すべきのことを成せば、神たるもので自然と同化するのである。而して自然と同化するには、過去を繼承し現在を建設し、進んで將來を建設し、更に廣く之を全人類に及ぼすので有る。されば我が祖先が他民族に對するを見よ、渾然として更に差別を設けてゐない。西洋でも東洋でも他民族を征服したことは多々ある。而して其征服者は優良民を以て自ら居り、被征服者は劣等民として、奴隷として酷使して居る。之に反して我が祖先には少しも之を認めない。其征服は征服で有つたけれども、被征服者に對しては、同一民族と同じ待遇をしたので有る。伊弉諾伊弉冊二尊の經營も、土着民の征服で有つたけれども、土着氏を酷使したやうなことは、藥にしたくも見當らない。征服に次て起るものは、雜居であり雜婚で有つた。加之被征服者にも、相當の地位を與へた。之れを彥火々出見命の龍神の女に娶るに見よ、將た又神武天皇がオトウカシを重用せられたるに見よ、後日漢民族の思想の流入してより、奴婢などが出來たので有つて、夫れと混同してはならぬ、是れ我が祖先の理想の發現に外ならない。其他一々例を擧くれは、枚擧に遑ないので有る。是れ即ち狹國は廣く險國は平けくの意味で、其理想の發現

には、國境も人種の別もなかつたので有る。猶又我祖先の言葉には征服せよと云ふ意味の言葉は無なかつた、諸のまつろぬものどもをことむけよとは云つてゐるけれども、言むけは征服せよの意味ではなく說き伏せよの意で有る。凡ての人類を、我が大理想の下に說服し同化し、以て平和の理想鄕を建設せんとしたのである。之を神武天皇の長髓彥に於けるに見よ、皇兄五瀨命の戰死を憤り、劍柄を叩いて我は忘れず討ちてしやまんと宣ひながらも、長髓彥の勢漸蹙るを見給ひては、降を勸められたではないか。之れ其人類愛の發露に外ならぬ、故に曰く「遠き國は八十綱打ちかけて引き寄せよ」と、其來り服するを云ふので有る。予は我が國の宗敎家に向つて言はん欲す、諸君は何故に我が祖先の、此の大理想によりて說を爲さないのかと、若し我が國の宗敎家にして此に目覺めたならば、我國に於ける幾多の宗敎は忽ちにして影をひそめてしまうであらう。而して我が民族は此の大理想の下に統一せられて同一方面に向つて勇往邁進することを得るで有らう。噫嘻吾人は何故に吾人の祖先が殘したる、此の大理想を棄てて、或は佛敎に或は儒敎に、或は基督に其理想を求め轉々し、今猶歸一する所が無いので有らうか、我々は二千年の長年月を斯の道に迷ふた、最早覺めねばならぬ、覺めよ覺めよ、さうして速に汝が祖先の大理想に向つて進め、之れによりて以て全世界を統一し、而して平和の歡樂境を作れ、今にして此の道に目覺めなかつたならば、我が民族の爲めに由々敷しい一大事に遭遇するで有らう。

現代に於ける國民思想の動搖は、何が原因を爲してゐるので有らうか、若し我が國民全体に、此の祖先の主義精神が、理解せられてゐたならば、今日の動搖は見なかつたで有らう、今日の混亂には陷らなかつたで有らう。嗚呼道は近きに有り、之を遠きに求むるの必要はない、而して我が祖先の理想は、佛敎の如く儒敎の如く、一方に偏してもゐなければ、基督の如く假定神格を捉へ來りて、人を愚にしてもゐない。人として飽くまでも眞理を捉へてゐる、故に之を個人に施せば、自己の建設となり之を大にしては民族としての大精神となり、人としては人類愛の表現となり、之を超人的に云ふときは、自然の同化となり、神人の一致となるので有る。人間味が勝

つが故に、形而上を忘れて物質慾にのみ走る、超人間に過ぐるが故に、自己を忘れ民族を忘れ、形而下を度外視して顧みないことになる。此の兩者は云はば片輪で有る畸形である、滿足な發展の出來やう道理がない、世の中の人凡てが孔子で有り釋迦で有り基督で有つたら、之に越したことはないので有るが、夫れは望んで得らるる可きものではない。人は只人としての理想を失はぬやうにせねばならぬ。其理想を知らしめ、其向ふ所を知らしめるのが宗教であつて、彼の參禪祈禱を勸めるのが、宗教の精神では無いのである。之を我が大和民族の神に祈るに見よ。祖宗在天の靈に向ひ、祖宗の心を心として、將來に建設せんことを誓つたのである。我々は斯くの如き罪惡を犯したから、助け給へ許し給へと、哀訴嘆願するものではない。茲に偉大なる活動力が有るのである。鞏固なる精神が確立するので有る。

三　我が祖先の宗教

上述の如く我が民族には祖先から、神教と云ふものが傳へられた。然るに此の教義は後來頗る變化してはゐないか、儒教の說く所は、日常の座作進退より、治國平天下の事に至るので有るからして、我が民族の建設思想と抵觸せざるが故に、其の渡來に際しても、何の問題も起らなかつた。然るに佛教の東漸に當りては尠なからぬ大騷動を引き起したのである。之れ一は物部蘇我二氏の勢力爭ひも、其の騷動を手傳つたとは云へ、其の大原因は、祖先傳來の神教思想と、佛教思想との衝突に外ならない。此の衝突に於て神教支持者の物部氏倒れ、蘇我氏獨り國政を左右するやうになつたけれども憐れむべし、佛教は自己のみの力では廣まり兼ねたのである。是に於てか黃泉に關する神話を附會し、本地垂迹論を作りて、爰に神教の寄生虫となるに至りて、漸く其の教を廣めたのである。さうして此の寄生虫は我神教の肉を喰ひ、遂に骨に迄喰ひ入つて終つた。又我が神教の徒之を追つ拂うこともせず、伊邪那美命須佐之男命を以て、黃泉の大神となし、得々として奇蹟を說き、其の膝下に哀を求めて寄生した佛教の爲めに、盛んに提灯持ちを爲し、自已の眞の教義は、之を遠き上代に放置して顧みない。我が祖先の神教は決して奇蹟を說くもの

ではない。堂々と純理を説いてゐる。

（イ）大和民族建國の大精神　日本神道は、我が帝國成立の大精神であり、我が民族活動の根柢で有ることは、寛博士の説明を要する迄もないことである。然るに我が六千餘萬の同胞中眞に我が神道を理解してゐるものが有るであらうか、余は恐らく一人もないではあるまいかと思ふ。此の如く思ひ切つた言葉を吐くことは、淺學菲才の予として甚だ不遜では有るけれども、是れ實に予の隱す所なき表明で有るのである。二千五百餘年の國家を形成したる大精神、六千餘萬民族活動の根柢である所の神道の精神が、此の民族に理解せられてゐないと云ふことは誠に受け取れぬ話であるが事實は事實として之を否定する譯には行かぬ。

上古の祭政一致は、神道を以て國教とせられたものである。以來神に奉仕するの徒にして、神道の大精神を布衍し其の之を國教とせられた所以が那邊に在るか、眞に之を理解し、之を宣明した人が果してあるであらうか、祭祀を事とした中臣氏は如何、神主は如何、漢學渡來し佛教傳來してより以來、神道を奉ずるものにして、神道を説くものにして、或は儒教を以てし、或は佛教を以てするものはありても、未だ神道を説くに神道を以てするものがない、近年に至りては、神道を説くに基督を以てするものさへ出て來たのである、是れ蓋し神道に經典なしとするの罪であつて、神道に經典なしと云ふのは、即ち眞の神道を理解してゐないからである。

（ロ）何故に神道に聖典なしと云ふか　從來神道に對して忠實なるの徒がなかつたとは云はない。國學者にして愛國の士は競ふて神道を研究してゐる、即ち本居宣長以下頗る力めたりと云ふ可しである。然るに、其の學風は平田篤胤に至つて其の盛を極めたのであるが、明治に至つて是れ等の學風は地を拂ふに至つたのである。一時非常の盛を極めた神道が、何故に一時に衰退したしであらうか。是れ蓋し神道を説くに立派な神道としての聖典を有しながら、之を以て説を爲さなかつたからである。佛教が三千餘年の間、宗教としての命脈を保ち、幾多民人の歸依する所となつてゐるのは、全く釋迦を中心とする五千餘卷の大藏經が、其の經典として今日猶嚴存してゐるからである。又基督教が、佛教と對立してゐ

るのも、クリストを中心とする聖書がある爲めである。若し基督敎から其の聖書を棄て、佛敎から大藏經を取り去つたならば、果して此の二敎は今日の盛を來したのであらうか、經典なき釋迦、聖書なき基督は二聖が如何に神格あり、佛身ある崇高偉大なる表現であつても今日迄宗敎としての命脈は保ち得なかつたであらう。然り其の聖書と經典とは實に其の宗敎の心臟である。然るに我が神道は經典なしと云つてゐる。是れ自ら神道としての心臟なしと告白してゐるものであつて、自ら害ふも甚しいではないか、神道を說くの徒が何時までも舊套を墨守して、時勢の進運と伴ふことを知らないのは其心臟を失つてゐるからである。或る一派のものは云ふ。神道には經典なし是れ他の宗敎の外に超然として凡ての長所を抱擁し得る偉大な宗敎で有るからであると、無宗敎の時勢と逆ふものであることを知つてゐながら、此の如き論を爲すのは、我が大日本帝國が建國以來無宗敎であつたと云ふと同じで、思はざるの甚しいものである。又あるものは云ふ、上下二千五百年の歷史は即ち神敎の聖典であると、何と云ふ强辯であらう。何處に歷史を有しない國があらう。然るに我が國體が他の國體と趣を異にしてゐるが故に、之を以て聖典なりと云ふので有らうか。心臟なくして此の吾人の肉體が形成せられざるが如く、神道としての心臟たる聖典なくして其の肉體たる國體を形成し得られやうか、此の世界無比の國體を形成したのが果して神道有るの故で有つたならば、其の神道の心臟たる可き聖典が存してゐなければならぬ。

天照大神を以て我が民族我の表現神となすことに於て、予は決して、異論を挿むものではないが、何故に天照大神を以てさうするのであらうか、天祖託宣の語が天照大神によりて傳へられたが爲めであらうか。若し然りとすれば、天祖託宣の語は即ち神道の聖典と云ふ可きで有らう。然るに之を以て神道の聖典なりとは一人も論じてゐない。佛敎は釋迦を以て眞理の表現となし、其の說法を以て經典としてゐる。基督敎も亦さうである。然るに我が神敎ひとり、天照大神を以て表現神となしてゐながら、託宣の語を以て聖典と認めてゐない。予も亦之を以て神道の聖典とは認めない。此の如くにして神道を說くに我國に現はれたる凡ての神々

について色々の研究をなしても、遂に聖典の何れにあるかを認め得ない。故に天照大神を以て表現神となすと云ふことに就ても、何故に表現神となすかを問はば、皇祖神である、天祖であると云ふの外、漠として其說を聞くことが出來ない。是に於てか神道に聖典なしの語は發せられたのである。故に我が表現神たる天照大神の崇高偉大なる神格を說くにしても、或は佛敎の論を借り、或は基督敎の說を借り來りて云々するのであつて、夫れは神道としての天照大神ではなく、神道としての表現神ではない。我が天照大神を說くには神道の聖典によりて說を爲さねばならぬ。佛基二敎の論を借り來るのは、我が皇祖神に對して冒瀆の甚しいものと言はねばならぬ。

以上の如く、我が神道には聖典なしと云ひ、或は我が神道及び、其の表現神たる天照大神を說くに、或は佛敎、或は基督、或は儒敎の論を借用して說を成すのは、全く我が神道の精神を理解してゐないからであり、神道の精神を理解しないのは、神道の聖典を知らぬからである。而して神道の聖典を知らぬのは即ち眞の神道が如何なるものであるかを理解して居ないからで有ると云ひ得るので有る。

（ハ）神道の聖典　以上述べたる如く、神道に聖典なしと云ふのは眞に我が神道を知らぬものの言である。さうして自ら日本神道家を以て任ずる人にして、往々此の如き言を吐き、或は古神道家の如く、大禍津日神、八十禍津日神を以て、惡の本となし、神直日神、大直日神を以て、善の本と爲して、クリストの善惡起源論見たやうな說を爲し、或は徒に奇蹟を談じて能事となしてゐるものあるは、實に我が古語の研究が不充分で有つたからである。彼の天御中主神より阿夜訶志古泥神迄は、實に我が神道の聖典にして、宇宙觀も人生觀も實に此の中に言ひ盡されてゐる。天祖託宣の語、祭神、及び祭神の祝詞は、實に神道實行上の方法若しくは心得に過ぎない。

（ニ）神　神とは何か、之を天神の解說に見よ。天之御中主は神の本体である、天と云はんか、地と云はんか、天も地も彼れが一部分の形に過ぎない。老子が所謂道可道非常道名可名非常名と云つたのは之れに相當する。けれども老子は之を見は

すべき、適當の言葉なきに苦しみ、玄之又玄衆妙之門と云つて御茶を濁した。所が我が祖先は立派に之を言葉の上に見して說明した。天之御中主が夫れである。全知全能の神と假定する必要もなければ、眞如などと漠たる抽象的標語を用ゐる必要もない。何處までも天之御中主である。天も地も日月も星辰も、皆是れ天之御中主の分身ではないか、之を科學的に云ふときは宇宙生成の原動力たり、之を哲學的に云ふときは即ち神で有る。解說し得て妙ではないか。日月星辰は彼が有形の建設であり、春夏秋冬は彼が無形の建設である。而して其建設活動は、幾億萬年の上代より、幾億萬年の將來も、永劫に之を行ふので有る。故に天神の條には、更に進んで其の建設活動を解いてゐるではないか、高御產巢日神、神御產巢日神以下が夫れで有る。之を哲理の方面より見るときは彼れが永遠の建設であり、之を科學方面より見るときは、宇宙進化の順序である。而して淤母陀流、阿夜訶志古泥に至つても、主体たる彼れは猶之を抱擁し、之を建設してゐる。此の主体の活動は、未來永劫底止する所を知らない。是れ之を靈魂不滅といふのである。此の如く我が祖先の宇宙觀は、哲理よりするも、科學よりするも、一点の非難を加ふべき餘地を見出さない、立派なもので有つて、之れから我が祖先の敎義は生れたのである。然らば即ち人とは何か、我が祖先は人を如何に解してゐたのであらうか。

（ホ）人　日月星辰が天御中主、即ち宇宙の主体の一部の見はれたもので有る如く、人も亦其の片影で有る、之を祭神の祝祠に見よ、皇神と云ひ又皇大御神と云ひ、而して天皇をば皇御孫命と云つてゐる。皇神、皇大御神とは、此の宇宙を統べ知らす神、即ち天御中主神で、宇宙の主体を云つたもので、夫れをばやがて天皇に移し奉れる所以は、天皇も亦此の人民を率ゐて、永遠の建設に向つて進まれるからである。且つ現人神と云ふ語は、實に此の主体の分身たることを率直に云つた言で、本居宣長等が之を以て、敬稱にのみ用ゐると思つたのは思はざるの甚しいものである。皇御孫命と云ふのは語を代へて云へば、天御中主の子、主体の分身の意である。而して同じく此の主体の片影たる、民人の統治者たる意をも含めて、スメラギと申すのである。既に吾人が主体の分身で有る以上、吾人は此の主体と共に終始すべきも

のである。之をば神人の一致と云ふのである。元來自然の同化と云ひ神人の一致と云ふ語は、幾多の學者が常住坐臥使用する語であるが、自然と人、神と人とが同根一体のものでなかつたなら全然一致し同化しやう道理がない。我が神道の說く所は其の根本が神人の同体であるが故に、其の一致も同化も甚だ容易である。

（ヘ）生と死　前に述べたやうに、人は宇宙の主体の具体化したもので、人生の其のものは、主体の現實に現はれたものである。而して死は即ち、主体への歸一である。故に我が祖先は人死すれば置酒して音樂歌舞し、之れを送つた。是れ實に靈魂不滅の原理であらねばならぬ。而しながら、一度主体に歸したものは、再び人間として相會ふことが出來ない。是に於てか、之を送るや悲みもし、泣きもするのである。死に對する祖先は、以上の如き見解を持つてゐたのである。之を今日の科學上の言葉を用ゐて說明すれば、人の死は即ち還元作用である。

由來我が大和民族の持長は、西洋人等に比して死を恐れない、我が武士道が發達したのは、全く此の死を恐れない点が與つて力あつたのである。而して何故に死を恐れないかと云ふ原因に至つては、之を國民性に歸して、其の國民性は何に依りて養はれたかを知らない、死を恐れないと云ふのは、實に祖先が生は主体の現實化、死は主体への歸一なりと云ふ、敎義が其の根源を爲してゐるのである。

（ト）我が民族建國の根柢　今日萬世一系の皇統を奉戴する民族は、全世界に唯我が大和民族あるのみである。然るに何故に吾人のみ世界無比の國体を建設し得たか、其由て來る所を論ずるに至りては、空たり邈たりである。是れ實に我が祖先の敎義が其の因を爲してゐるのである。

祖先の神道は宇宙の主体の活動と共に活動し、其の建設と共に建設するのである。故に其の建國の始めに當りて、皇室は吾人の宗家であらせられる許りでなく、其の當時に於て最も建設の程度高かつたのである。然るに吾人は己に國を爲した以上、其の過去に繼承し現在及び將來を建設しなければならない。夫れは天皇より下庶民に至る迄、少しも異る所はない。天皇は天皇としての建設、即ち此の國家民族を率ゐて、人類の大建設に向つて進まれ、人民は人民としての建設、此の國家の主

体たる天皇と共に其の自己及び民族の建設に向つて進み、又夫れが天皇の建設と相一致して、人類の大建設に向つて進む所以で、即ち各其の建設に於て、他を害ふことなく、互に相蝙合同化して人類の建設に進むのである。是れが實に今日世界無比の國体を建設し得た所以である。

（チ）神人一体　吾人人類のみならず、日月星辰より禽獸虫魚に至る迄、此の主体の分身でないものはない。けれども已に人たる以上、草木たり禽獸たり、虫魚たり、日月たり、星辰たること能はざる如く、飽くまでも人で有る。之れ老子の所謂名可名ものである。さうして人は人としての建設をなさねばならぬ。人としての建設是れ即ち人道である。彼の一時、半獸主義だの全獸主義だのと稱へた人が有つたが、まさか禽獸には爲り得なかつたらう。此の如き說を爲すのは、恰もヌテツキを以て箸に代へ茶腕を以て火鉢に代ゆるの類で、寧狂人の沙汰と云ふべきである。人が禽獸としての建設を爲すやうであつたらば、之れ即ち人類の破壞で有ると共に、主体の破壞である。併しながら此の主体は絕對のものである。主体が絕對のものであるが如く、人も亦絕体のものである、絕對のものは決して破壞を許さない唯絕對的建設あるのみである。善を善とし、惡を惡とするのは、之れが爲めである。忠信孝悌も、仁義禮智も、治國平天下の術も、慈悲も、博愛も、皆之れ建設の道である。此の如くにして主体と終始する、是れ即ち神人一体であるからである。之を吾人の祖先は神ながらと云ふ語を以て見したのである。神人一体なるが故に、吾人の肉体は亡びても、吾人の精靈は未來永劫に生きるのである。斯くして宇宙の主体たる天御中主の活動建設が未來永劫のものなるが如く、吾人の活動建設も亦未來永劫のものであらねばならぬ。主体の建設は之れを日月星辰に見よ、春夏秋冬に見よ、晝夜朝暮の變遷に見よ、何人も其の活動建設の永劫ならざるを疑ふものはないであらう。若し主体の靈魂が常住不滅のものでなかつたら、現在の宇宙も吾人も之れを見出すことは出來ないであらう。此く主体の建設が永劫なるが如く、吾人が祖先の建設も亦永劫のものであり、之れを繼承したる吾人の活動建設も亦未來永劫のものであらねばならぬ。斯くて吾人が祖先は遠き無極無始の太古より

主体と終始して活動し人類無終無盡の建設に努力し、主体が總てを抱擁同化するが如く他を抱擁同化すべく邁進したのである。

（リ）祖先の祭神　彼の天神の條は、我が祖先が或る時代の大文化を傳へたものので有つて、決して輕々に看過すべきものではない。元明天皇の時代は、文化も餘程進んでゐたに拘はらず、記紀の撰者及筆者が、何故に天神の條に對して無理解で有つたか。若し之に對して理解が有つたならば、日本書紀の天地創造論は出なかつたので有らう。之れ遺憾ながら、我が古代文化の逆轉を見はしてゐるものである。如何に其の文化が逆轉しても、永い間古代文化の中にはぐくまれた思想は、國民の遺傳性となつて見はれてゐることを見遁すことは出來ない。此の點に至りては、儒佛二家の教義も、遂に之を奪ふことが出來なかつたのである。生島巫祭の祝詞に曰く

生島の御巫の辞竟まつる、皇神たちの前に白さく、生國足國と御名をば白して、辞竟へ奉らくは、皇神の敷き坐す島の八十島は、谷蟆の狹渡る極み、鹽沫の留る限り、狹國は廣く峻國は平らけく、島の八十島墜ることなく、皇神たちの依さし奉る、故皇御孫命のうづの御てぐらを稱へ言竟へ奉らくと宣る。

辞別けて伊勢に坐す、天照大神の太前に白さく、皇御神の見はるかし坐す、四方の國は、天の壁立つ極み、國の退立つ限り、青雲の靄く極み、白雲の墜りゐ向伏す限り、青海原は棹柁干さず、舟の艫の至り留まる極み、大海原に舟滿ちつづけて、陸より往者は荷の緒縛ひ堅めて、磐根木根ふみさくみて、馬瓜の至り留る限り、長道間なく立ちつつけて、狹國は廣く、峻國は平けく、遠國は八十綱打ち掛けて引き寄ることの如く、皇大御神の寄さし奉りたまへば云々

又大祓の祝詞に曰く

天の御蔭日の御蔭と隱り坐して、安國と平らけく知し召さむ國中に、成り出でむ天の益人等が、過ち犯しけむ、雜々の罪事は、天津罪と云々此くのらば、天津神は天の磐門を押開きて、天の八重雲を稜威の千別に千別きて、聞こし召さむ、國津神は高山の末、短山の末に上りて、高山のいほり、短山の伊穗理を撥き別けて、聞こし召

さむ、此く聞こし召しては、皇御孫の朝廷を始めて、天の下四方の國には、罪と云ふ罪はあらじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つことの如く、朝の御霧、夕へのみ霧を、朝風夕風の吹き拂ふことの如く、大津の邊に居る大船を、舳解き放ち艫解き放ちて、大海原に押し放つことの如く、彼方の繁木が本を、燒鎌の敏鎌もて、打ち拂ふことの如く、殘る罪はあらじと、祓ひ給ひ清め給ふことを、高山の末短山の末より、さくなだりに落ちたきつ、速川の瀨に坐す、瀨織りつ姫と云ふ神、大海原に持ち出でなむ、此く持ち出て去なば、荒鹽の鹽の八百道の八鹽道の、鹽の八百會に坐す、速秋津比賣と云ふ神持か呑みてむ云々

と、是れ延喜式に掲ぐるもの、もとより古代日本の語其のままでは有るまい、然しながら大祓なるものは、決して現日本の產物ではない、日向日本以前より傳へ來つたもので、只其文句には、時代に適應すべく多少の修正は加へられたであらうが、其の大意に至りては、蓋し大差はなかつたので有らう。此の生國と云ひ足國と云つたのは、何を云つたのであらうか、此國をして生國たらしめ、足國たらしめふことである。此の國をして生國たらしむる、之を如何にすべき。此の國をして足國たらしむる、將た之を如何にすべき。生國足國の語漫然と之を見るべきではない、是れ即ち不斷の建設を說くものではないか。吾人が不斷の建設的努力がなかつかならば、如何にして天の壁立つ極み、國の退き立つ限り、荷の緒ゆひ堅めて、長道間なく立ちつつくることが出來やうか、將た又鹽沫の留る限り、大海原に棹梶干さず、舟滿ちつづくることが出來やうか。是れ實に常住不斷の、我が建設的努力の結果を云つたものである。此の如くにして來るものは拒まず、拒むものは即ち言向け和はすに於ては、何ぞ狹國あらむや、何ぞ峻國あらむや。將た又鹽の八百道の八鹽道の、海さか遠く隔つとも、やがては眞帆片帆かけて往きかう國となるであらう。是れ即ち人類の大建設であり、同化であり、抱擁で有る。他を同化し抱擁し、以て人類の建設を全うせんには。明らけく清けく美はしき愛の上に立たなければならない。人の罪を惡まず、人の惡を云はず、清く澄める心でなからねば無し得られない事である。大祓のことは、實に自己の身心を清らかにせんが爲めの行事であるのであ

る。故に天が下四方には今日より罪と云ふ罪はあらじと、秡ひ清むるので有る。此の美はしき心を以て、建設するとき、何物が之を拒み得やう、若し此の心がなかつたならば、浦安の廣けき國も、やがては五月蠅なす荒ぶる事共出で來りて、狹國險國となるであらう。將た又呼はば答へん近き國も、恨み叛きて天さかり行くのであらう。

（ヌ）祭政一致　祭政一致の實際は祈年祭によりて遺憾なく伺ひ知ることが出來る。祈年祭は陰暦二月即ち猛春の頃行はれたものである。然るに其の祝祠を見れば、禰宜が弱肩に襷をかけ腕まで水に濡れ高股まで塵埃をかきかけて耕作に從事することを神に誓つたものである。祈年祭と云ふが故に豐年ならんことを漠然と神に祈つたと思ふのは大きな誤りである。唯春季より耕作に從事するが故に其の耕作に努力すべきことを誓ひ、之れと同時に其の氏子に向つて耕作に從事することを命令したものである。祈年祭のみならず出征について神を祭るも出征して敵をことむくべく戰鬪に臨んで大いに勇往邁進すべきことを命令したものであある。其の他の祭神も皆之れと同一轍に出でたもので、天皇の祭神は其の民人を率ゐて神に誓ひ且つ命令せられ、國造の祭神は氏子を率ゐて神に誓ひ且つ其の氏子に天皇の命令を傳へたものである。之れ實に上代に於ける政祭一致の實際であつた。神功皇后の三韓征伐に當り國中の神々が悉く出征したやうに見えるのは、各氏姓の長及伴造等が其の祭神に向つて出征を報告し奮戰を誓ひ天皇の命令を其の氏子に傳達し神社に藏められたる武器を取り出して外征に從事したことが、語り傳へる間に奇蹟化したものである。後日國家に重大事件ある毎に勅使を官幣大社に派遣して報告祭を行はれるのは、この上代の祭政　致の遺風が傳つたものである。而して我が祖先は上は御一人より下は庶民に至る迄、之を以て天神を（大自然を）祭り、之を以て祖宗に誓ひ、之を以て身を率ゐ、之を以を後人を敎へたのである。悲い哉、祖國の一大事變は、之れ等の敎義までをも暗黑の中に投じたのである。後人天神の條を讀み、此の祝詞を誦するの眼はあつても、之にこめられたる大敎義の存するを知らず。祭政一致の眞義を悟らず、祭神の事を以て、單に

平凡なる年中行事として、顧みざるに至りては、慷して又慨すべきの極みである。

四　三種の神器

三種の神器に就ては、古來幾多の學者が議論してゐるが、或は儒教思想を以てし、或は國學者、若しくは神道家が、捉はれたる議論を爲したもので、眞の神器の意義を解き得たるものはない、只山田孝雄先生が、先年雜誌藝文に發表せられた、八尺瓊曲玉の意義は、最も其の當を得た說明である、故に曲玉に就ては、ここに先生の許を得て藝文誌上に載せられた論文を、其のまま掲載して、予の解說に代へることにした。

（イ）八咫鏡　八咫鏡に就いては、明察とか、淸く明らけく澄める心等と解いてゐるが、悉く誤まつてはゐなかつたらうか、天祖託宣の言葉に、「此の鏡を見ること朕を見るが如くせよ」とあるのは、即ちこの神鏡の眞意義である。天神の條の意義を見るに、我々人類は天御中主即ち主体の具体化である、之を物に例へたら、鏡の前に立つた主体と、鏡の中に映れる影の如きもので、影の一擧一動は、主体の一擧一動と一致する如く、吾人の一擧一動は、之れ又宇宙の主体と一致しなければならぬ。宇宙の主体と一致することが、神人の一致である。即ち鏡を見るとき、主体と片影との一致を認めるであらう。又國家を形成し、民族を統一し、人類の建設に向つて進むに當り、其の民人と、其の民人を代表すべき主体、即ち天皇とは、常に相一致して、活動建設すべきものである。而して天皇と民人との一致したる活動建設は、即ち民族の建設であり、民族の建設を擴大したるものは、他民族の抱擁同化となり、全人類の建設となるのである。是れ即ち宇宙の主体の活動と一致する所以である。神鏡の意義は、我が大和民族が神道の大精神を意味したるもので、之れを個人に行へば個人として主体と一致し（神人一致）、之れを民族に行へば、民族を擧げて主体と一致し、而して君民の一致となり、更に擴大して人類建設てふ、神人の大一致となる。此の意義を寓したるものが神鏡である。天照大神が前きに解說したる如きものであれば、「此の鏡を見ること朕を見るが如くせよ」と託宣せられたるも、亦宜なり矣と云ふべしである。

（ロ）神劒　神劒は剛勇を意味し、裁斷を表はしたるものであると論じてゐるが之れも劒其のものを其のままに神寶とせられたもので、剛勇等と論ずるは末のことである、神代の條にフツノミタマと云ふ言葉がある。フツはフツフツと裁ち行く義で、之れが劒の用である、併しながら劒を以て天下を治めよの意ではない、若し武斷を以て天下を治めよの意であつたならば、神代の條に今少しく武斷政治の模樣が伺はれねばならぬ。神代卷全編を通じて、武力政治、威嚇政治の樣子は、藥にしたくも見當らない、武御雷の建御名方征服には、頗る武力を用ひたけれども、それは一時の權道であることは、國讓の交渉が、徹頭徹尾平和方略を用ゐたるに見ても明白である。又其の當時の言語として、言むけ和せの語はありても、征服せよの語はない。是等の点より見ても、威服の爲め殺伐の爲めの劒ではなく、其の意義は外にあらねばならぬ。即ちフツフツと斷ち行く義で、能くきまりをつけることを現はしたもので、剛も武も威も此の裁斷の中に含まれたことで、事難かしく論ずる必要はないのである。

（ハ）八坂勾瓊　山田先生曰く、古より玉を以て道德の象徵とせるものは、多くは正統記又は三輪物語の說の如く、曲妙、委曲、柔和、善順、溫潤等の德をこれにあてたり。これもとより全然不可なりといふにあらねど、こはただ一箇の玉の場合のみ。惟ふにこれらの說をなす人々は、支那の玉、ことに趙氏連城の璧などの如きものを以て、說を立てたるものにして、かの八坂瓊の勾玉の實相に思ひ及ばざりしが故ならむ。

三種の神器の瓊は、一箇の珠玉にあらず。書紀には八坂瓊曲玉を授けたまふと、あれど、その上に天石窟の段には、八坂瓊之五百箇御統と見え、古事記には、その玉を作らしめたまへる事をも叙して

「科二玉祖命一令作二八尺勾瓊之五百津之御須麻之珠一」

と書せり、之によりて見れば、これ實に一箇の玉にあらずして、多數の珠玉を、玉の緒によりて貫き合せて、一としたるものなること明なり。

余が研究は、まことにこの八坂瓊の五百箇御統の玉の名稱と、考古學者が考察せる

實物とによりて端を發せり。これによれば、曲玉のみならで、管玉その他の玉をば、多くとりて、之を緒にて連らねて一として、頸に掛け、又は裝飾としたるものにして箇々の珠が、その緒にて結合せられて、相依り相持ちて、統一体となれるものなることを知る。八尺瓊又は八坂勾玉といふ、ヤサカは、その緒によりて結合せられたる玉の統体の長きをいへるにて、從來の説の如きにあらざるべきか。即ち古事記に常に「八尺」とかける如く、鏡の名の「八咫」と同じく、尺度の名の尺を以て、量りたる名なるべきか如し。古事記傳には、この八尺をば、一箇の玉の周邊の大きさならんと想像せられたれど、さる大きさの勾玉の存するをきかず。こは如何にしても御統の玉、即ち緒によりてつながれる玉の總体の長さなるべし、彼の書紀卷第二十七に

「橘は己が枝枝生れれども玉に貫くごとき同じ緒に貫く」

といへるが如く、萬葉集に「竹玉を繁に貫き垂れ」など、所々に見ゆる如く、多くの玉を緒に貫き、連らねて、個々のものを結合せるものを以て、八尺瓊と稱したること明なるをさとるべし。

兎にも角にも、かの八尺瓊の勾玉をば、單一の珠玉と見るのあやまりなるは明かにして疑ふべからず、かくの如く見來れば、おのづから之を道德の象徴として見るにも、從前の説を訂すべことあるに至るべきは自然の勢なり。

惟ふに、從來は之を一箇の玉と見、又そが勾玉とあるによりて説に窮したるならむ。「まがたま」の「まが」は屈曲の義なり。而してその實物また屈曲せる狀を呈せり。しかるに道德上よりいへば、「まがる」は「なほき」の反對にして、邪惡の方面に屬すべきものなり。この故に從來の説みなその屈曲を轉じて、委曲、曲妙などの語を以て説を立てたり。之につきて三輪物語は次の如くにいへり。

問玉を仁者の象となすべき爲のもならば圓玉なるべきに、曲玉を用ることいかが。云、曲は審なり。仁は愛の理なり。仁義の心は至誠にして、あまねからずといふことなし。天道造化の工を見るに、蟻螻の小虫に至るまで、つまびらかにしてたがふことなし。生理の至誠なるが故なり。且父は子の爲にかくし、子は父の爲に隱す。直き事其中にあり。仁愛の曲委は天地の直なり。大舜の瞽瞍に

つかへ給ふは、つづら折の難所を行くが如し。九皐といはずして八坂といふは、君子は易に居て命を待つの意なり。仁人は民をめぐむこと曲玉の如し。心に誠をもとむれば、あたらずといへども遠からず。

と、曲を以て直と說かんと欲すれば、かくの如くにもいはざるべからざらんと思へども、また窮せりといふべきなり。從前の學者の說を以て、三種の神器を十分に解し得ざること實に上の如し。

と、此の說誠に予が意を得てゐる。予は先生の此の說を讀むに及んで、始めて八坂瓊勾玉の眞意義を知つたのである。是れ實に人民統治の大綱を示されたるもので仁愛も圓曲も曲妙も溫和仁柔も、是等は抑も末の事である。八尺は長きを意味す、長き緒に貫ぬき止めたる玉は是れ八十伴の緒である。此の貫ぬき止めたる玉の散り散りになりたらんには、八尺瓊曲玉の裝飾たる用はなさない。夫れと共に天皇が民人統治の大綱、一たび亂れたならばどうであらう、其の國家は、遂に國家としての資格を失う。此の意味をば、八尺瓊曲玉に寓せられたものである。仁愛も圓曲も曲妙も、溫和、仁柔も、剛直も、決斷も、剛勇も、夫れ等の意義は主体と一致する行動の上に見はるべきもので、神鏡の中に盡されてゐる。

五　神代の行政機關と其勢力範圍

(イ)　神代の政体

天孫の降臨が、若し南洋民の漂流であつたならば、我が神代史の中には、其の政体の一端を伺ふことは、不可能の事であらう。我が國の歷史家が、未だ曾て神代の政事狀態に付いて、其の官制の有無をすら、論じてゐない所を見れば、神代の政治の一端及び、其官制に付いては、理解がないからではあるまいか。

先つ之れを伊邪那岐伊耶那美二尊の條に見るに、大海津部の長官(大海津見神)有り其下には水門神有り、水夫長(久比奢母智神)あり、大山津部の長官あり(森林部現在の大林區署)、農業部の長官あり(野槌、今の農務省)糧食部の長官(木都分忍男神、現今の食糧局)あり、而して天孫降臨の際には、久米大伴の二部あり(武官)、地方長官には比古あり、更に下りて彦火々出見命の時に、サヒ持の神あり(工業部の長官)て、一般行政組織は

殆んと整へるを見ることが出來る。（鉏持神に付ては、宣長以下色々說を立てゝゐるが、皆誤である、サヒ持は野槌が野つ持即ち野の長官、潮槌が潮つ持即ち水路部長である如く、サヒ持はサヒの長官である、然らばサヒは何であるか、サヒを小刀と說いたのはよいが、之れを節刀等と說いたのは誤りである、サヒは今日のサヒ槌のサヒである、而してサヒ槌はサヒッ持の意味ではない、サヒを叩く槌である、さればサヒはノミ等皆細工に用ゐる、刄物を云ふのである。故にサヒ持ちと云へは細工をする者、サヒ持の神と云へば工業部の長官である）

（ロ）古代日本の勢力範圍　以上解說したる所は、予が目に映したる我が神代史で有る。今予は此の神代史を解說し終へて、更に遡りて古代日本が、如何の狀を爲したるかを想ひ、更に下りて現代日本を見て憮然たらざるを得ないのである我が祖先が、其の民族を擧げて、人類建設の同一理想に向つて、邁進ししたるの時、其の發展が、如何に華々しかつたで有らうか。將た又其の民族の意氣が、如何に活潑々たるもので有つたらうか。此の大思想の前には、太平洋も廣きを知らず、ヒマラヤも高きを失つたで有らう。故に曰く

皇御神の見はるかし坐す、四方の國は、天の壁立つ極み、國の退き立つ限り、青雲の靄く極み、白雲の墜りゐ向伏す限り、青海原は、棹柁干さず、舟の艫の至り留まる極み、大海原に舟滿ちつづけて、云々、狹國は廣く、峻國は平けく、遠國は、八十綱打ち掛けて引き寄する事の如く云々

と、又其の身心を秡ひ淸むる、大秡の祝詞に曰く、

荒鹽の鹽の八百道の八鹽道の鹽の八百會に坐す云々

と、何ぞ其の構想の雄大なる。現代人士の夢想だもしない所で有らう。彼等は斯の如くにして、唯着々として其の理想に向つて進んだので有る。由來支那上代に於て、其の理想鄕としたる仙鄕をば、東海に置いた所以のものは、蓋し我が古代日本が、此の如く美はしき理想國で有つたことを傳へ聞きたるのみならず、其敎義が神人の一致で有つたからでは有るまいか。而して更に思ふ。上に引きたる祝詞の如き、朝に夕べに渺茫たる大海に面したるものにあらざれば、到底發し得ない語で

有る。是れこそ、大和朝廷に於て發せられた思想とは思へない。而して琉球及び八丈島には、我が古語の存するもの多く、且つ又我が神代史に現はれたる遺風の存するものよりして考ふる時は、是等の地方は我が古代日本の版圖たりしは言ふを俟たず。前に天照大神の條に於て述べたる如く、斯羅始祖赫居世、弗矩内王及び、古朝鮮記の王儉等に由りて見る時は、我が神代に於て、已に勢力の韓半島に及べるもの有りしを想見するに足るので有る。されば天孫降臨前の古代日本の版圖は、現代に比して遜色なかりしもので有らう。而して此の大版圖を統轄する、一に海路に依らざるべからず。一葉の偏舟に棹して、此の大海を横ぎるとき、恰も龍神の浪を驅るが如きものが有つたで有らう。瞑目一番思うて此に至れば、眞に血涌き肉躍るを覺ゆるのである。後日の退嬰萎縮は、我が祖先の夢想だもしなかつた所で有らう。然るに今や即ち如何。物質の精彼が如きものあるに拘はらず、民族の意氣亦將に漸く沈衰せんとす。外には軍備限制論あり、内には近眼者流の極端なる縮少論あり、加之黨爭は日を追うて甚しく、徒に西洋思想にかぶるるの徒、内自ら省みること能はず、階級爭鬪の端漸く見はる、實に寒心に堪えないのである。何ぞ少しく眼を外に轉じて、列國の施設を見ないのであらうか、内に一致する所なく、どうして外に向つて、手足を伸ぶることが出來やう。亡國の民たることを欲せざるものは、速に祖先の理想に立ち歸れ。さうして古代日本民族の意氣を、現代に發揮し、以て更に現代日本をして、將來に建設する所有らしめねばならぬ。

神代史の解説なりて詠める

岩土の天の吹男のいつのめの
大禍津火の昔おもほゆ

結論

予は本書を草するに當り、幾度か我が祖先の精神的文化が、他民族に比して餘りに偉大で有り、而して餘りに實際的で有つたことに讃嘆の聲を放ち、又二千餘年の長年月を、我民族と沒交渉で有つたことを思ひては、落涙を禁じ得なかつたので有る。三聖の徒幾度生るるも人としての道を求めんには、人其ものの根元を極め、此に根柢を置いた所の道でなかつたならば、夫れは人の道とはなし得ないので有らう。故に釋迦は之を眞如に歸し、孔子は天命と云ひ、基督は神と云つた。併しながら憐むべし、基督の神は方便に墮し、孔子は現實に過ぎ、釋迦は幽遠に過ぎた、是に於てか、其之を奉するもの各得あり失あり、其得は遂に其失を償うこと能はず、或は虛僞と爲り或は爭鬪となり、或は空々寂々となつて終つた。然るに我が祖先の道を敎ふるのは、彼の幽玄と、彼の現實とを合せて、更に方便を用ゐてゐない。然るに佛敎東漸し、漢學東海を渉るに及んで、我が祖先の所謂神なるもの、先づ其眞意義を失ひ、陰陽の說は其思想を擾亂し、神敎の宣誓は、浮屠氏の朝夕の勤行と同一視せらるるに至り我が神敎の徒神ながらの道を稱へて、其義を悟らず、國學を學ぶもの、徒に歌句の末節に囚はれて、祖先の大道を顯彰するを知らず、堙滅茲に三千年、遂に世を擧げて、祖先に文化なしと云ひ、甚しきに至つては、我祖先を以て、南洋の漂流民と斷じて、得々たる輩を生ずるに至つた。慨して又慷すべきでは有るまいか。然しながら、我が祖先は實に堂々たるもので有つた、實に偉大な民族で有つた。孔子も釋迦も我が祖先に比しては、頗る眼光の小なるを覺ゆるので有る。見よ孔子は劃然と自他を分別し、他民族と己れと相伍することを欲しなかつた。故に他の民族は之を夷狄として斥けてゐる。即ち其敎義は、漢民族のみの敎義で有つて、他民族の抱擁力が無い、他民族の抱擁力が無いのは、平等觀念の缺如で有る、天命が自己民族のみに限られた天命で有る。天豈に漢民族にのみ私するものならんや。孔子が子路の死の如何なるものなりやを尋ねた時に、未だ生を知らず安んぞ死を知らんと答へたるに見ても、其現在に急で有つたことが知られる。孔子は其道なるものを自

已民族と現在とに局限して終つた。釋迦は枝葉を棄てて根幹のみを採つた、同じく一本の木で有る、枝葉根幹相供はりて、茲に完全なる木として發展することが出來る、枝葉を取り去つた根幹のみ、幾ら培つても、其發展は望まれない。加之其之を說くにも、力めて之を幽遠にした傾きが有る。如何に幽玄の語を用ゐても、之を聞くものが、悉く釋迦で有つたら、直に之を解し得るで有らうが、そうは行かぬ。人には賢愚强弱が有る、是に於てか沈思默考難行苦行しなければ、其一句の意義をも解脫しかねるので有る。故に其敎を奉するもの、無我の境に彷徨して、現在の有我に歸るを知らない。此の如くにして、彼等の民族は衰へ、彼等の國は亡びた。孔子の道は天命に從ひ、釋迦の道は眞如に生れ、基督の道は其假定したる全知全能の神を基とした。三聖が其道とする所の根柢と攻究したことは、誠に偉とすべきで有るが、人間としての道との調和が不充分で有つた。故に基督一度死するや、奇蹟百出今の世に及んでも、我は神を見たりなどとたわことを言つてゐるものが有る。釋迦の所謂眞如、孔子の所謂天命に至つては之を解するもの幾何かある。若し之を解してゐたならば、佛敎は今日の如く、其敎祖の片言雙語を捉へ來つて、流派を分つ必要もなく、又儒家の徒が老子を排斥することもなく、而して、天なり命なりを借用して、悲觀の申譯、若しくは自放自棄の腹癒せに用ゆるやうなことは無かつたであらう。彼の三聖は、地下に於て今日の有樣を見て、自家の敎義の根柢と、人間との不調和で有つたことを歎じてゐるので有らう。其の不調和の一大原因は、人間としての起原を說かなかつた爲めで有る。人間としての起原を說かんには、宇宙其ものを解說しなければならない。我が祖先は實に此の解說を示して、人道を說いたので有る。三聖再び生るるも、宇宙凡てが自然の子、即ち自然の具体化したるもので有ると云ふ、我が祖先の基本觀念を否定することは不可能で有らう、孔子の天、釋迦の眞如、皆是れ自然の代名詞ではないか。人も自然の子たることを否む譯には行かない。而して自然は人類を生んだ、さうしてこの肉体を與へた、茲に人間を建設して、之に與ふるに此の目、此の耳、此の口、此の鼻、而して此の四肢と、此の智力とを以てした、此の賦與には、甲乙によりての厚薄はない、皆平等で有る。此に於てか自

然は平等で有ると云はねばならぬ。而して此の目、耳、鼻、口、四肢、智力は、何の爲めに與へられたか、之れ即ち自己及び將來の建設の爲めである。人間は自然に建設せられ、自然に抱擁せられ、さうして更に建設すべく、凡ての機能を能へられてゐるので有るから、我々は大に建設しなければならぬ。其建設と云ふことは、自然は之を人間の建設に委ねて、少しの束縛をもしない。是に於てか自由で有らねばならぬ。併しながら、凡ての人としてのものは、同一目的に向つて進むので有るから、他の建設を害ふてはならぬ。凡ての人間が、他の自由平等を害ふことなくして、建設の目的を達するには、平和でなからねばならぬ。茲に始めて人類愛が起るので有る。彼の仁義禮智、慈悲博愛は、皆之れから生ずるので有る。忠信孝悌も皆建設の道で有る。不仁、不義、非禮、無智、或は忠信ならず、孝悌ならざるの徒を惡む所以のものもの、他の建設を害ふからである。自然を亂すからで有る。既に建設すべく生れた吾人は、此の肉体の諸機能が活動し、得る限り、建設に向つて努力す可きで有る。此の理を押して個人より父子夫婦兄弟に及ぼし、廣く之を民族に行ひ、進んで全人類に及ぼすに於て、些の不調和を見ず、些の支障を來さない。茲に大なる抱擁力があり、同化力があるので有る。故に我が歴史を繙いて之を讀めば、至る處に他民族の抱擁同化の後を發見するのである。我が民族が劒を執つて起つたのは、獨立自衛の爲め、萬止むを得ざるに出でたので有つて、之を國讓の交渉に見よ、之を神武天皇の東征に見よ、決して漫りに干戈を弄んだものではない。其降を容れ、來を撫するに至りては、一視同仁、彼と我と少しも異なる所がない。其平等觀念の發達せる、實に世界無比と稱するも過言では無いので有る。故に人皇の世に入りても、皇室と人民との相近き、之を雄略天皇の御製に見よ。

ふぐしもよ、みふぐしもち、此の岡に菜摘ます兒、家のらへ、名乘らさね、空みつ大和の國は、のりなめて、我こそをれ、しきなめて、我こそませ、吾をこそは、せとしのらめ家をも名をも

予は此の御歌を誦する毎に、君臣の交情の如何に平易にして、濃やかなりしかを想見するので有る。又小子部連の建設の如き、君臣の交と云はんよりは、父子の情と

も云ふ可く、更に下りて、大化の改新に於ける、班田收授の法の如き、支那の井田法を加味したりとは云へ、我が祖先の平等觀念が、不言不語の間に、我が民族の血管に傳はり來れるものの、發露に外ならないのである。而して之を小にしては、其家族制度に見よ。父は子に強いず、子は父を要せず、頗る自由思想の發達してゐたことが想見せられる。併しながら、其自由は今日の如く、破壞的自由でなく、其平等も、亦、破壞的平等ではなかつた。即ち其平等も自由も建設的で有つた、故に其化の及ぶ所不安の聲なく、怨差の聲を聞かない。嗚呼自由平等の天地に、平和の歡樂境を建設すべく、我が祖先が高唱したる、此の人類愛の大理想の前には、之を拒否すべき何者も無かつたので有る。予は今此の祖先の思想を名つけて、建設的自然主義と云ひ、其政治を名つけて、建設的自然主義政策と云言はんと欲するもので有る。我が祖先は如何なる場合でも、建設的であつた。故に其移住は建設的移住で有り、其改革は建設的改革で有つた。神武天皇の東征も、崇神天皇の改革も、大化の改新も、皆さうで有つた。其建設を愛し、破壞を惡むのは、實に我が祖先が此の大理想より体得したる國民性の遺傳で有つた。何れの國に見るも、其或る時代に於ける、或るものの感化による、或る一少部分に限られた、少數の人間が、多少平和を好愛した例がないではないけれども、我が祖先の如く、其全民族を擧げて、同一理想に向つて進んだ民族は、之を發見し得ない。然るに悲し哉驚くべき地殼の一大變動は、此に我が祖先の文化と、民族とを破壞して、日向山中の暗黑時代に陷らしめたので有る。此の時代こそ、實に我民族が、滅亡の深淵に、薄氷を踏むの時で有つて、一歩を誤てば、今日の我々を見出すことは出來なかつたので有らう。其滅亡より免れ得たのは、我が祖先が不撓不屈の建設的努力の賜ものに外ならないので有る。其不撓の努力の效は、遂に神武天皇の東征となり、大和民族をして今日あらしめる基礎を作つたので有る。併しながら、日向山中の苦闘は、其生活に急にして、亦文物を顧みるに遑なく、遂に其文化の大半を失ふに至つたので有る。唯幸にして、天神七代の條は、我が祖先道德の根本觀念として、之を傳へたので有る。さうして、祖先の此大理想は、遂に遺傳性となり、言論としては見る可きもの頗る少しと雖も、其習風に施設に發現

せられた。其儒佛二教の渡來に際して、神教が絶大の勢力を維持したのも、實に祖先の教義が、絶大に爾く力有るもので有つたからで有る。或る一派の學者が、之を以て、祖先崇拜の因習に歸して、一蹴し去らうとするのは、思はざるの甚しいものと云はねばならぬ。祖先崇拜は、祖先を信賴するからで、祖先を信賴するのは、祖先の偉大なる教義が與つて力有るからで有る。然るに海外諸國との交通の便開け、西洋の文物制度の輸入せらるるに及び、其物質文明に眩惑せられ、西歐思想の流入するに及んでは、自己祖先の思想を考究するを思はず、西歐思想を以て、最も進歩せるものとなし、或は平等を稱へ、或は自由を論じ、或は民權を唱へ、民主政策を叫び、紛然雜然として、往昔儒佛二家の末流によりて、擾亂せられたる思想界をば、更に搔き廻はしたのである。斯くて、近年に至りては、其弊益甚しく、或は社會主義となり、無政府主義となり、ポリタリズムを稱へては、階級鬪爭を誘發して顧みず、曰く、一時の破壞は永遠の建設なりと、何と云ふ淺間しいことで有らうか、其所謂一時の破壞は永遠の破壞で有ることに心つかない。少しく眼を開いて、我が祖先を見よ、さして其大思想の雄叫びを聞け。西人の思想は源を自己に發してゐる、故に己人としては頗る好都合な事が多い、個人としての權利思想は、頗る發達してゐるけれども、義務的思想に至りては、殆んど見るに足らない。或は儒家の末流が、漫りに義務犧牲を押賣りしたるに對しては、毒を以て毒を制する底の效果は有つたらうが、夫れは一時的のことで、永久の藥にはならない。我が祖先は、其思想の根抵を、大宇宙に置いてゐる。大宇宙と個人と、其根抵の差は、實に天地も啻ならずと云ふべきである。其の根抵の薄弱なるものを捉へ來りて、我深遠雄大なるものに代へんとするのは何たることであらうか、見よ現代の所謂自由平等若くは民主政治は、我が祖先の遠き上代に於て、建設的に實施せられてゐたではないか、況んやポリタリズムに出發した、破壞的共產主義は、大化の改革に際し、建設的共產主義として、立派に土地の上に實現せられたではないか。現代に稱へられつゝある、西歐思想を以て、最も進歩したりと云ふを止めよ、彼等の主義政策を以て、彼等の新發見と爲すことを止めよ、我が祖先は、少くも三千年前に於て彼等が三千年後に、事新しく稱へつつ有る思想よ

りも更に更に進歩したる思想を有し、之を實行してゐたので有る。之を現代の物質に例へたなら、我が祖先はマッチを用ゐ、西人は燧石を用ゐてゐる、而して我が國の一部のものが、マッチを棄てて、燧石を稱賛してゐるのである。之をしも愚の骨頂と云はずして、何をか愚の骨頂と云はうか。漫りに祖先研究を排するを止め、さうして汝の祖先を知れ。此の大思想の發露する所、必ず偉大なる功績を擧げてゐる、近くは之を明治維新の大業に見よ。天智天皇の大化改新以來、唐風の摸倣漸く盛んなるに及び、兵農分立し、純然たる漢民族の專政政治となり、權臣柄を弄しては王道衰へ、遂に天下大亂の因を爲し、建武の中興も、長袖者流の誤る所となりて果さなかつた。然るに、明治大帝に及んで、何人が云ひ出したともなく、神武の古へに復れと云ふ、言葉が出現した。其神武の古へに復れとは、如何なることを意味したのであらうか、一部の漢學者の言ふ如く、兵農の分立を廢止し、天皇親裁の復活のみを言つたもので有らうか、否々、之を　明治大帝の御誓文に見よ、更に之を輔弼の臣に見よ、三條岩倉の兩公を始めとして、西鄕大久保木戸の諸公に至る迄、其學ぶ所は儒家の學で有る。如何に西洋文物の長を取るの識見が有つたとは云へ、君主專政政治の國風が、平和の間に、憲法政治の現代と代る所以のものは　明治大帝が　祖宗の心を以て、心とし給ふた、大御心の然らしむる所である。明治大帝の大御心では、此の代議政体を以て、八十萬神が、天の安河原に會して、中つ國移住を始め、其他諸政を計られた政体の再現と思し召させ給ふたで有らう。されば萬機を公論に決し給ふの大御心は　皇祖皇宗の遺訓として、一も二もなく　大帝の御嘉納あらせられたことと拜せられる。上御一人の大御心が、既に　皇祖皇宗の御心で在らせられたので有るから、却て二三頑迷なる神道家が、不平を漏らしたことはあつても、シナドの風の天の八重雲を吹き拂ふことの如くに、消滅して終つた。安政の昔黑船來に脅やかされて、長夜の夢より覺めた民族は、明治初年、西洋の事情の判明すると共に、此に期せずして、三千年來の遺傳として、我民族の腦裏に潛んでゐた、建設的思想は勃然として擡頭し來り、西洋諸國が數世紀を費した進歩をば、僅に半世紀の間に爲し遂げたのである。若し此の建設的思想の遺傳性が無かつたならば、彼の因

習の久しき、王侯の地位を有し、地方分權に狎れ來つた三百の諸侯が、其地位を棄つる弊履を脱するが如きものが有らう、必ずや建武の末の如く、猴獼世を掠むるの大動亂を捲き起したので有らう。我が帝國を除いては、他の諸國の改革は、大破壞運動の結果で有つて、幾多悲慘な出來事の繰返へされた賜ものである。之を佛に見よ、露に見よ、希に見よ、其國内を擧げて、流血の大慘事を演出したではないか、之を支那に見よ、彼の宣統帝の退讓は一朝にして易きも、其民族の統一は、今尙不可能の狀態では無いか。唯我國のみ、群雄割據の狀態より急轉直下　神武の古へに復した所以のものは、國民性として祖宗より傳へられたる或るものが　明治大帝を俟つて上下一時に發露した結果と云ふ可きで有る。されば明治の始め、神武の古へに復れと云ひ出だされたのは、兵農の分立を廢止して、天皇親裁のみを意味したのではなく、三千年來堙滅したる祖先の遺傳が目覺めた結果で有る。然るに悲しい哉、我思想界に一人の祖先の大理想を顯彰するものなく、其論說の聞く可きものがないために其大危機に際して目覺めたるものが、其平和に復するに及んで、又再び眠に落ちんとしてゐるので有る、否々、我民族の或るものは西洋文化に中毒して摩痺を起してゐる。覺めよ、覺めよ、速かに覺めよ、さうして其の目覺めは現實であれ、永遠であれ。否らざれば天の一方には野獸の如き毒爪を研いて、我が隙を睨つてゐる民族が有るでは無いか。

將來の爭ひは單に國と國との爭ひではない。曾て獨逸のカイゼルに由りて稱へられた黃禍論は何の爲めで有つたらうか。其首稱者たるカイゼルは、日耳曼大帝國の出現が、南柯の夢と化し去つたと共に亡びたけれども、第二のカイゼルは太平洋を隔てて、今や着々として其歩を進めてゐる。眞の軍縮は彼等の欲する處ではない、彼等は名を軍縮に籍りて其軍備を擴張せんとしつつ有るのである。見よ彼は海軍縮少會議によりて、我の六に對し十の海軍力を有することとなつたではないか、眞に海軍が其國を守るのみに止めるとしたら、此の比例は正に其數を轉換すべきで有る、見よ我が二千有餘里の海岸線に對して、彼は其幾分の海岸線を有してゐるのか、彼或は云はん、予は布哇比律賓を護らざる可からずと、彼が布哇比律賓を

護ると共に、予は臺灣南洋サガレンを守らざる可からず、海軍力の比率は正に其海岸線の延長に依る可きもので其面積と人口とに依る可き性質のものでは無い。既に自ら海軍々備の縮少を提唱しながら一方には海軍砲の仰角を引き上げ、以て其射程を増大せんと試み更に全國の大動員演習を爲す、彼の此の演習は何れに備へんとするもので有らうか、英領加奈陀が彼の敵で有らうか、黑西其か、ブラジルか智利か、秘露か、其何れを見ても、餘りに相手方が貧弱ではないか。

抑もペルリが、我國に來たのは何の爲めで有つたか、一部人士は彼を以て、我の今日ある彼の賜ものとして、彼を贊し、彼の銅像をさへ建立したけれども、彼が來航の目的は他に在つた、實に恐るべき目的を包藏して居たので有る。然るに我が國民は一齊に立つて、外敵に當らうとした、此の上下一致の護國の精神が、彼の目に映じなかつたことはなからう。時恰も南北戰爭となりて其目的は果されなかつた。爾來幾星霜、我が發達と進歩とは彼等上下の目には如何に映じたで有らう。適カイゼルの黃禍論を耳にするに及んで、彼等は慄然として肌に粟を生じたのである。

斯くて疑心暗鬼を生ずるに至つた。さうして彼は事毎に我が國力の發展を沮害せんと試みてゐる。支那に於ける排日問題の起る毎に、彼の國人が其背後に潜んでゐるではないか、又近時瀕發しつつ有る、東洋移民排斥の烽火は、先づ彼によりて發せられたではないか。彼が飫饒を誇る、カリフォルニヤの平野は、何人の力によりて開拓せられたので有らう。彼等は道を以て交るの國ではない、利を以て相寄るので有る。故に利有れば即ち就く、苟も其己れを利せんが爲めには、方法と手段とを撰ばない。己れに優らんとするものには、嫉妬排擠至らざるなく、其弱きものに對しては、凌辱加へざるなき有樣で有る。嗚呼、我が同胞よ、彼等の美辭佳肴に目を移すな、彼等の軍備縮少の聲に欺かれるな、彼等の軍備縮少は其實軍備の擴張で有る、其擴張したる軍備は之を何處に用ゐんとするので有らうか。東亞の一角、風雲の急なるは何の兆で有らうか。

支那の孫文は、彼の日本移民排斥を論じて、是れ彼等が亞細亞民族に對する宣戰の第一歩で有ると云つたのは實に至言で有る。然れども予をして言はしむれば、其

宣戰の第一聲は、獨帝カイゼルによりて發せられ、今や第二聲を擧げてゐる。而してカイゼルは單に聲を擧げ今や實際化して來た。斯くて第三聲、第四聲、遂には砲火を以て來り迫り、ベルリの昔に立ち返るで有らう。由來彼等白人の異人種に對する征服は、絶對征服で有る。彼等は他を抱擁し他を同化すると云ふやうな、大きな平和的理想は持たない。廣く人としての建設と云ふことには理解がない。故に他の建設を害ふて平然としてゐる。我が建設を害ふものに對しては、我が將來の建設の爲めに干戈を執らなければならない。我々は祖先の遺訓によりて、此のまつろはぬ醜草をことむけて、之を同化し以て世界平和を建設して自然の賦與を全ふしなければならない。祖先の大理想を實現しなければならない。

有史以來五千年、此の地球上に國を爲した民族は頗る多種族に涉つてゐるけれども我が祖先の如く偉大なる思想を有した民族は之を他に發見し得ない。所謂彼の英雄が、ナポレオンの如くチムールの如く、アレキサンダーの如く、其自已の遊戯的慾望を滿足せしめんが爲めに、武力統一を夢みたことは有つても我が祖先の如く、全人類の平和統一を稱へた民族はない。三聖の如く或る時代に其民族の或る一人が、多少我が祖先に近い思想を呼吹したものは有るけれども、我が祖先の如く其民族凡てが同一理想に向つて進んだ民族は之を發見することが出來ない。之によりて見るときは、我が祖先は實に地球上に於ける幾多人類を凌駕して、最も進歩し最も發達せる優秀卓絶の民族で有つたので有る。吾人は其子孫である。此の祖先が優秀卓絶せる血汐は今尙ほ吾人の体内に漲つてゐる、吾人は此の血を受けてゐながら、徒らに西人の糟粕を嘗めて、之に滿足せんとしてゐる

此の祖先に對して何の顏がある誠に耻つべき事ではあるまいか。吾人は二千餘年の長年月の間を外來思想の爲めに誤まられてゐた。今や現實に祖先の大思想に目覺むる時が來た吾人は速に祖先が遺した、世界平和統一に向つて出發しなければならない。此の征途を遮り此の理想の實現を沮害するものが有つたならば人類の幸福の爲めに世界平和建設爲めに干戈を執ることも決して辭すべきではない。吾人は吾人の祖先より世界平和統一の使命を托せられたので有る。此の

理想を實現することは實に吾人の使命を果す所以である。見よ、吾人の祖先が其理想を表象したる天照大神を。而して更に之を大日本帝國の國名に見よ。將た又之を其國旗に見よ。天地初發の上代より燦として吾人の頭上に絶大無限の光を放つてゐるではないか。

祖先研究　我が大和民族と世界統一　終

大正十四年六月十五日印刷
大正十四年七月二日發行

我が大和民族と世界統一
定價金參圓五拾錢

著者　安藤政直

發行者　東京市小石川區戸崎町四十四番地　大野長吉

印刷者　東京市小石川區戸崎町九十三番地　大島恒次

發行所　東京市小石川區戸崎町四四　振替東京六〇〇七三番　稲淵堂書院

不許複製
檢印之證

284
537

終